【休載】ダーリン・イン・ザ・フランキス:死の少年

らてまる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひとりの少女は願った
自らが心から愛せる恋人（ダーリン）との再会を
ひとりの少女は願った
自らを救った相棒と永遠に共にあることを
そして俺は願った
自らの過去の救済を…

目次

第一部

Episode.1 …… 1
Episode.2 …… 11
Episode.3 …… 18
Episode.4 …… 26
Episode.5 …… 30
Episode.6 …… 34
Episode.7 …… 38
Episode.8 …… 44
Episode.9 …… 48
Episode.10 …… 51
Episode.11 …… 62
Episode.12 …… 68
Episode.13 …… 76
Episode.14 …… 87
Episode.15 …… 99
Episode.16 …… 111
Extra-1 …… 121

第二部

Episode.17 …… 124
Episode.18 …… 132

第一部

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１

Ｓｉｄｅ…???

『比翼の鳥』というらしい…

その鳥は片方の翼しか持たず

雄と雌、ツガイで寄り添わないと空を飛べない…

そんな不完全なイキモノ

でも何故だろうか…

そんな生命の在り方を

美しいと思ってしまったのだ…

美しいと…感じてしまったのだ…

Ｓｉｄｅ…???　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ…???

最近、よく夢を見る…

遠い昔にあったような、なかったような…

そんな…

そんな、曖昧な記憶

雪が降りしきる寒い冬の日…

紅い角の少女と自分によく似た幼い少年が大きな樹の下で…
なんだったっけ…？
こんな感じで徐々に思い出せなくなっていく記憶
これが本当に自分が体験したであろう記憶なのかすらも疑わしい
脳は忘れている
目を覚ますとどんな夢だったかなんて思い出せない
でもこの夢を見ると決まって涙を流してる…
この呪われた身体にこびりついた…
そんな記憶だ…

Ｓｉｄｅ…???　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ…イチゴ

「なあ、イチゴ、『イクサ』見つかったか？」
「全然ダメ…ヒロとゴロ―は？」
私は目の前にいる男子に結果を尋ねる
「こっちもダメだ…相変わらず隠れるのが上手いヤツだよ…」
「今日の説明会も出てなかったよな」
二人は首を横に振る
ダメか…
「出ていっちゃうのかな…」
ココロは心配そうにしている
「いいじゃないですか!!同乗した女性操縦者（ピスティル）が死ぬ…そんな曰く付きの『死神』の男性操縦者（ステイメン）が我らが１３部隊からいなくなるんです。あんなバケモノが一緒にいると考えると怖くて夜も眠れませんよ」
と唱えるミツル
「アンタねぇ!!今の所、私もイチゴも問題ないからいいじゃないの!!」
ミクはそう抗議する
――『死神』
それは彼の異名

彼と同調を行う女性操縦者(ピスティル)はほとんどが死に至る…
死ななかったとしても心が死に廃人になってしまう
そのため実験部隊である、この第13部隊に送られてきた
事前に彼のCODEは教えられていなかった
だからこそ驚いたのだ
昔の彼と今の彼の変貌具合に…
右眼には眼帯を着け、黒く美しかった髪の毛は銀色になっていた
まるで、別人に変わってしまったかのような…
そんな感じだった
それでも彼は昔からの私の相棒だ
だからこそ私が、彼をFRANXX(フランクス)に乗せてあげるんだ
彼が昔くれたブレスレットを見ながら
小さくこぼす
「……イクサのばーか」

Side：イチゴ　out
◇
Side：???

「……いや～　静かだなぁ…」
他のみんなは知らない草むらで一人寝っ転がり、木々の間から
ちょっとだけ覗く空を見ていた
「見えるのは左眼だけ…か…」
それもそのはず
俺の右眼には眼帯が着けてある
別に事故とかで欠損したわけではない
単純にコンプレックスなのだ
いまここには誰もいない
ここで死ねば誰にも気が付かれないままひっそりと死ねるだろうな～

チャプン…とすぐ近くで水の音が聞こえた
そういえば近くに湖があるんだったっけ？
しかし不思議だ…
こっち側のことはみんなは知らないし…
静かな時間を邪魔されたくない一心で倉庫からいろいろ借りて（勝手に持ち出して）、鳥よけを作ったからこっちには誰もいないはずだよな…

音の方向に歩を進める
湖畔にやってきて、まず目に入ったもの
それは脱ぎ捨てられた俺達とは少し違う…赤色のパラサイトの制服
そして水面に浮かぶ少女の姿だった
しかし途端に少女の姿が見えなくなる

「…まさか溺れてッ…!!」
ジャブジャブと制服が濡れようとも関係なしに先程少女がいたところまで入っていく
ザバァ!!と大きな音をたてて俺も目の前で水が跳ねる

俺は目を見開く…

時間が止まったようだった
初めて見る女性の裸体
紅く艶めく双角
翡翠色の瞳
目尻の赤いアイシャドウは白い肌に映えていて
桜色の長くキレイな髪
こうやって彼女の特徴を並べているが端的に言えばとても美しかった

しかし…
しかしだ、
何故この少女は口元に魚を咥えているんだ？
俺の方をチラッと見るとプッっと咥えていた魚を湖へと戻す
恐らく溺れたと思ったであろう少女は単純に素潜りをしていただけだった
まぁ…事故が起きなくてよかったね
俺は湖から上がり上着を脱ぐ
この子がいきなり飛び出てきたせいでビチャビチャなのだ
お、いい感じの木発見
俺はその木に上着を掛け少女の方を見る
「なんで水浴びなんてしてたの？」
「おかしいな… ウミの水はしょっぱいって聞いてたのに…」
なにを言っているんだろうかこの子…
質問に答えてくれない
「そりゃあウミじゃないもん」
「知ってるよそれくらい…でもボクが知ってる中でいちばんウミっぽいところだなって…」
ウミ…
前に文献で見たことがある
なんでも昔は地球の約7割がウミが覆っていたとのこと
「キミは泳がないの？」
急に聞かれて返事に戸惑う
「へ？ あー、まぁ…ここに来たのはちょっとした探検みたいなものだから」
「ふーん、じっと見てるから泳ぎたいのかと思ったんだけど」
「君が溺れてるんじゃないかって途中で心配になってさ」
「ふふ…助けようとしてくれたんだ…礼を言うよ」
そう微笑む彼女…
少女は服を着ながら俺に問うてきた
「その眼帯は？」

「ああ、少し他の人と違って気味悪がられるから…隠してるんだよ」
「見てもいい？」
うっ…迷った…、
でも何故だろう…彼女なら俺の眼を見ても怖がらないし気味悪がらない
不思議に彼女のことを信じたいと思った
初めて会ったけど…そんな気がした…
「わかったよ…はい」
眼帯を外すと黄金の瞳が露わになった
こちらの頬を抑えてまじまじと俺の右眼を見つめる少女
「へ～…すごくキレイだね」
「え？」
そんなこと初めて言われた
この呪われたこの眼をキレイだなんて
「うん、すごくキレイ…宝石みたいだ」
「そっか」
彼女は振り返りこちらをじっと見てくる。
「ふたりきりのときは眼帯外してほしいな」
と言いながら眼帯を投げ返してきくれた
それをしっかりと受け取りポッケにしまう
「もう一つ質問してもいいかな？」
「どうしたの？」

「その制服…君もパラサイト？」

その言葉に俺は眉をひそめる
そして、ウ～ンと少し唸って考えた
「半分アタリで半分ハズレかな？」
「え～？なにそれ？」
不思議そうにそして面白そうに少女はこちらを見てくる
「乗れるんだけど、乗ったら駄目なんだ。終わった後パートナーはみ

んな運がよくても廃人に、だいたいみんな死ぬよ。こんなんだから周りからは『死神』なんて呼ばれてる」
「じゃあキミが噂の？」
噂だなんてそんな有名なのか
いい方の噂……ではないだろうな
「たぶん？なんとも無かったのはＣＯＤＥ（イ）：０１５（ゴ）ってやつとＣＯＤＥ（ミ）：３９０（ク）ってやつなんだけど俺と違ってふたりともうまいから。他の人とパートナーになってる。だから俺に居場所なんかないよ」
「なーんだ。じゃあボクと一緒か。」
「え？」
俺と一緒？
この子は今そう言ったのか？
「ボクもいつもひとりだよ？このツノのせいでね。居場所なんて自分で作るものさ。パートナーだってまた作ればいい。作れないんだったら…」
「だったら？」
「奪え!!」
彼女は俺に掴みかかると俺の首筋を舐めた
しかも押し倒す形で…
「へ～…ドキドキする味だ…ピリピリして、何処か引っかかる…危険な味…」
「なにを言って…」
「それともキスがよかった？」
「キス…？」
キス…とはなんなのだろうか…昔海にいたとされる魚のことだろうか…
「そっか…キミたちは知らないんだっけ。特別なコトだよ…」
彼女は耳元で囁いてくる
「特別？」
驚きの連発…

この少女と出逢ってから色々とおかしい
情報量が多すぎて脳が爆発しそうだ
「ボク、キミに興味あるかも。」
興味持たれると大変そうなんだけど…？
「キミ、ボクのダーリンにならない？」
「ダーリン？パートナーのことか？」
彼女は俺に手を差し伸べながら続ける。
「キミの能力は…たぶんまだ眠っているだけだよ。ボクならそれを引き出してあげられる。キミはボクの角を見たとき怖がらなかったね」
「君だって俺の右眼をみても怖がらなかったじゃん？」
「そうだね‼じゃあおあいこだね」
口に手をあて、ふふふって笑う
彼女の一挙一動が胸に突っかかる
「ボクと行こうよ。ボクはキミが欲しい」
少女はゆっくりと少年の方へと手をのばす
俺はその手を…
掴まなかった…
いや、掴めなかった
俺のせいで彼女を殺したくない
会ってまだ少ししか経ってないけど…
彼女にはずっと生きていて欲しい
「俺と乗ったら…死んじゃうかもしれないんだよ…？」
「大丈夫、ボクを信じて、キミはボクのことを殺せないよ」
もう一度伸ばされる白く美しい腕
「さぁ…どうする？少年」
俺はその腕をつかもうとした
しかし…
「時間切れだ…」
ガサガサと草をかき分け現れる人たち
「探したぞ、何故いつも勝手にいなくなる。」

深い怪我を負った男性操縦者（ステイメン）が彼女に歩み寄る
「どうせ明日の入隊式まで暇だよ…」
「パートナーの俺が迷惑するんだよ」
といいながら男性は帽子を彼女に被せ、こちらに目を向ける
「君は…パラサイト候補生か。明日は入隊式だろう？コイツが邪魔して悪かったな」
「いえ…喋り相手になってくれて楽しかったですよ」
「ふむ、そうか。君に忠告しておこう。この女には近づかないほうがいい。コイツは誰でも扱えるような女性操縦者（ピスティル）じゃない」
「そう…ですか…」

立ち去ろうとする彼女

「名前‼君の名前は？」
咄嗟だった
背を向けた彼女に言葉を投げかける
くるっと振り向いてこちらを見据える
「ボクたちパラサイトに名前なんてある？でも…そうだな…『ＣＯＤＥ：００２』…みんなはボクのことゼロツーと呼んでいる」

「ゼロツー‼」
「なに？まだなにかあるの？」
他の人たちがいるからか少し不機嫌な彼女
「またね」
ニッコリと笑ってその言葉を彼女に向かっていう
『サヨナラ』じゃない…
その言葉を言ってしまったらもう会えない気がしたから
彼女は唐突の言葉で驚いたのかキョトンとした顔だったが帽子のつばで顔を隠しながら小さく「またね」と溢した

また会えるといいな…

俺のこの願いは、思っている以上に早く叶うことを、今の俺は知る由もなかった

Ｓｉｄｅ：???　ｏｕｔ

Ｅｐｉｓｏｄｅ．２

ｓｉｄｅ：???

翌日

入隊式当日
五組のパラサイトが新しく入隊した
「なぁなぁ大人たちだぜ‼」
「しかも俺たちのためにあんなにいっぱい‼」
『君たちは選ばれた存在だ』そう七賢人（パパたち）は言った
物心がついたときから俺たちコドモには番号が付けられ
男女一組で動かせる『ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）』と呼ばれる兵器で戦うことが
唯一の使命だと教えられた

それに値しないコドモは存在価値がない

だから俺はこの鳥籠から出ていくことを決めた

このクソみたいな世界から逃げ出したんだ

◇

俺はここから出ていくが本部から特例で在留許可が出ているらしい
どうしてなんだろうな
俺はＦＲＡＮＸＸ（フランクス）を動かせないのに
「やっぱ、この眼のせいかな…」
右眼に着けられた黒い眼帯に撫でるように触れる
いつになったらこの眼は無くなるんだろうか

しかし俺はここに残るつもりはない
ただ1つ心残りが有るとすれば…
そうだな…やはり昨日の少女、ゼロツーにもう一度会って話がしたい。
それくらいだろうか

そして許されるのなら…彼女と
一緒に空を飛びたい

これがここを去る
ＣＯＤＥ：０１３　通称イクサの願いだった

Ｓｉｄｅ　???→Ｓｉｄｅ：イクサ
Ｓｉｄｅ　イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：第１３部隊

「結局、イクサのやつ来なかったな」
とフトシは心配そうに言う
「どうでもいいじゃんか、あんなキチガイ野郎のことなんてさ」
「最後までなに考えてるかわかんなかったヤツだったわね」
「イクサくん…無事に戻れるといいよね」
「多分あの船、ガーデンには戻らないよ…出戻りのパラサイトの話なんて聞いたこと無い」

イチゴは悔しそうに下唇を噛む

扉が開き　ハチが１０人のコドモたちを出迎える
「準備はできたか？」
１０人５組の少年少女たちは起動の儀の準備を始めていた
この後、どうなるのかも知らずに…

Ｓｉｄｅ：１３部隊　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

みんなの起動の儀…
せめてここを去る前に見届けておこうと外側に来ていた
柵に身を預け覗き込むように格納庫を見つめる
しかし、嗅覚が異常を訴えてくる
スンスンと周りの匂いを嗅ぐ
「……知らない匂いがする」
そう感じた時に、いきなり霧が立ち込みはじめ視界が白一色で覆われる
瞬間、耳を劈くように起こる爆発音
先程出航した船の位置に黒い影…
あれは…
「叫竜（キョリュウ）か…？」
初めて見る本物の叫竜
サイズで言うとモホロビッチ級だろうか
迎撃用の砲弾が叫竜に命中し、転倒する
しかしこれが駄目だった

転倒した叫竜の尻尾は砲台をなぎ払った

そして、叫竜は起動の儀が行われている方向へと動き出した
「まずい!!あっちは!!」
瞬間、俺の横を一頭の獅子が通り過ぎる
「あれは?!」
『２番格納庫損傷。デルフィニウム格納できません』
そのアナウンスが流れた瞬間、焦燥感に駆られる
デルフィニウムはイチゴとヒロのＦＲＡＮＸＸ（フランクス）…

助けないと…!!
考えるよりも先に体が動き出す
しかし、俺があちらに辿り着く前に目の前で叫竜が吹き飛んだ
そこにいたのは暴走形態（スタンピード）の紅い獣
俺には謎の確信があった
あそこにいるのはゼロツーであると

荒々しい戦い方…
あの男性操縦者（ステイメン）は恐らく死んだのだろう

叫竜は口に当たる部位を開く。更には尻尾までも展開。
その行動はなにかを溜めているようにも見える
あれは危険だと本能が訴えかけてくる

叫竜から放たれる一閃の光線
吹き飛ばされる獅子…
しかも向かってくるのは此方側だ
強い衝撃が身体に走った
意識も朦朧としてガクガクと震える膝を拳で叩き奮い立たせる
獅子の口が開き、そこからは男を担いだゼロツーが出てくる
「やぁ、昨日ぶりだね」
「ゼロツー？なにをして…なんて見ればわかるか」
「あぁ。バケモノ退治だよ」

俺はゼロツーから男を受け取り寝かせる
首元に指をあて、脈を測る
止まっている…
今度は閉ざされたまぶたを開かせ様子を見る
ダメだ…この男は完全に死んでいる
首元に書かれているＣＯＤＥを確認する
ＣＯＤＥ：０８１…

「せめて、安らかに眠れ…」
ゼロツーの方へと視線を向ける
彼女も頭から血を流す大怪我を負っている
せめて応急処置だけでもしないと…
しかし、その怪我を負ったまま、ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）へと歩を進めている
「おい待て!!とりあえず応急処置だけでも…!!」
「どけ‼邪魔だ‼」
パンッと甲高い音を立てながら俺の腕を振り払う
「無茶だ!!一人じゃフランクスは動かせない!!　できても死にに行くだけだ!!」
「ボクはいつもヒトリだよ。ヒトリには慣れてる。いつもそうしてきた。それに死ぬのだって怖くない…」
彼女のその翡翠の瞳は獲物を狩る獣のように鋭い
まったく…思わぬ形で俺の心残りが解消されるかもな…
思わず口角が上がってしまう
「笑ってるのか?ボクのことを…」
さらに眼光が鋭くなる
「君はひとりじゃない」
「は?何を言って…」
「俺がいる…!!俺は君を一人で逝かせたくない!!だから…」
「だから?ボクを止めるのは無理だよ」
「知ってるさ。だから…俺も一緒に行く」
びっくりしたような顔を浮かべるゼロツー
しかしすぐ、ニヤッっといたずらっぽく笑うと
「いいのかい?戻れなくなっても」
「ああ、このまま人殺しで生きるより君と一緒に戦って居場所を作りたい」
ゼロツーはふふと少し笑うと
「やっぱり…キミとボクは似ているね。キミのその目…ドキドキする。」
彼女は俺に手を伸ばす

「さぁ!!おいで!!」
俺は彼女の手を掴むとゼロツーは思いっきり引っ張り上げる
「キミを味あわせて…今からキミが…ボクのダーリンだ!!」

グイッと俺のことを手繰り寄せると
俺と彼女は唇を重ねた

その瞬間、俺の視界はホワイトアウトした

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イチゴ

突如現れた叫竜の攻撃を受けて吹き飛んだあのＦＲＡＮＸＸ（フランクス）
あそこにはイクサがいるのが見えた
イクサは手を引っ張られ、そのＦＲＡＮＸＸ（フランクス）に入っていく
その時に何故か唇と唇を合わせていた…
あれはなんだったのか
なぜか、心がもやもやする…
「イクサ!!」
そんなことを考えていると再び叫竜が襲いかかる
しかし獅子は紅き鋼鉄の戦乙女に姿を変える

もう一度放たれようとする破壊の光線
しかし投擲された巨槍により動きを一瞬止める

その一瞬で十分
２人の力を１つにまとめた槍をさらに奥まで突き立てる
「トドメだ!!」
凛々しい女性の声が響き渡る

トリガーが引かれると同時に放り出される薬莢
それが地面に突き刺さると０．１秒後、爆発する叫竜
私はそれを見ていることしかできなかった

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ

◇
彼の叫竜を討ち取った鋼鉄の乙女（ＦＲＡＮＸＸ）の名はストレリチア
ストレリチアから出てくる少年と少女
少年は普段つけている眼帯を外して薄っすらと目を開き金色の瞳を晒している
その姿に驚く者もいるだろう
しかし、それよりも気になることがあるものもいるだろう
「な、なんでイクサがＦＲＡＮＸＸ（フランクス）に乗れてるんだよ…？」
何故、彼があのＦＲＡＮＸＸ（フランクス）から出てきたのか
イクサは倒れ込むように眠ってしまった
「カワイイね、ダーリン♡」
イクサの頭をくしゃくしゃと撫で眠らせるゼロツー

これは隻眼の少年と双角の少女の物語である

――――見つけたよ…ボクのダーリン

Ｅｐｉｓｏｄｅ．３

Ｓｉｄｅ：イクサ

俺たちコドモが知らないその行為

彼女は、ゼロツーはそれをキスと呼んだ

叫竜の襲撃から一夜たった今、
入隊の儀の続きが小規模で行われた
あの胡散臭い七賢人（パパたち）やオトナは来てないけどな
俺とゼロツーが繋がった、あのストレリチアと呼ばれた紅い
『ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）』
俺はあの後からの記憶が無かった
しかし、体に感覚は残っている

だから俺は信じている

あれが俺の力だと…
彼女が言っていた眠っている力だと…

だからこそ…
なにがあっても戦い抜く
そう決めた…いや…
決まったんだ…彼女と出逢ったときから…

◇

彼女と出逢った湖畔

そこで少し本を読んでいたときだった
ＣＯＤＥ：７０３から『朝食の時間だよ』と呼び出しを食らってしまった

すこしだけ戻るか悩んだあとなんかゼロツーに会える気がするという謎の第六感を信じ
みんなのもとに戻る
玄関前へと行くと、そこにはイチゴがいた
「にゃにゃん♪お前はこの辺の子なのかにゃん♪」
と黒猫に話しかけているイチゴが玄関に座り込んでいる
俺が近づいてたのを察してか猫はイチゴのもとを離れこっちへと来る
この猫を俺は抱き上げ、イチゴに近づく
「どうしたの？イチゴ」
「イ、イクサ…戻ってたんだ…」
「まぁ、もうすぐ朝食だし…それにイチゴがいつも出迎えてくれるから」
イチゴは恥ずかしそうにすくっと立ち上がると
「だって毎朝誰よりも早く起きてどっかフラって行っちゃうんだもん」
「そう？」
「そうだよ‼それにイクサは居づらいかもだけど残ることになったんだから堂々としてればいいんだよ？」
「別に…気にしてはいないかな？」
しばらくの沈黙
そしてその沈黙を破ったのは…

イチゴだった
「あのＦＲＡＮＸＸは…イクサが動かしてたの？」
その問いに対する答え…

それは…
「どうなんだろうな…　よく覚えてないんだ…　だから…」
「だから？」

「もう一回乗って確かめる」
イチゴは驚いた顔でこちらを見つめる
それと同時に俺の制服の袖をギュッと握りしめる

「ダメだよ…」
ボソッと消え入るように何かを呟いたイチゴ
しかしその声は俺には届かなかった
「早くしないと、折角の朝ごはんが冷めちゃうよ。行こ」
俺の袖を掴むイチゴの手を無理やり掴み引っ張って玄関を通り過ぎる
「ちょ、ちょっとまってよぉ…」
困ったような、恥ずかしいようなモゴモゴとした声で反抗するイチゴ
ドアに手をかけようとした
それと同時に食堂の扉が開いた
「おい、イクサ急げ!!例の子食堂に来てるぞ…!!」
ＣＯＤＥ（ゴ）：０５６（ロー）の言葉に俺とイチゴは目を丸くする
「マジで!?」
「ゲッ…」
俺の表情が明るくなるのに対してイチゴは不機嫌になっていた
それと同時にイチゴは俺の脇腹をギリギリと抓り始めた…
「イチゴサン？痛いんですけど…」
「ふん…」
プイッとそっぽをむいてしまった

◇

ゼロツーは朝食を一足先に食べ始めていた
ベーコンに蜂蜜をたっぷりかけて…
その様子を見てミクは気持ち悪そうにそれを眺めていた
それを見てCODE：703も苦笑い

美味しそうに食べてるけど…
甘くないのかな
そうそう、お肉って蜂蜜に漬けてから焼くと柔らかくなるらしいね
知ってた？
「なんか聞いてた話と違うね」
ねぇ、CODE：214。お前、今さり気なく俺のパン一個取った？
まぁ…あんま食べないからいいけどさ…
「せっかくの美人も台無しだな…」
あのゴローも苦笑い
「まぁ…楽しそうでいいんじゃないかな？」
CODE：016はニッコリ明るく言う

俺はゼロツーに視線を戻す
それにしても…
あれだけ傷だらけだったのにもう治ってる…
〝叫竜の血を引いた少女〟…か……
まぁ異形と言われてるのは俺と一緒か…
食事を楽しんでるゼロツーを見ていると彼女に近づく影があった
「やぁやぁやぁ…キミの腕前は見せてもらったよ…よかったらこの俺様が一緒に乗ってやろうじゃんか…」
CODE：666…　ボクは彼が苦手だ…　何かと俺をキチガイ野郎とかイカレ野郎などと言ってくる
ひどいよね　いやほんとに
「あ～んな、イカレ野郎よりもうまくやれる自信があるぜ～？」
ほら言ったよコイツ

しかし今の俺は心中は、終始穏やかだった…
なぜなら、アイツが不用意にゼロツーに話しかけて無事なわけがない
そう、主に…
「あ”あ”あ”あ”‼なにすんだよ‼俺様の一張羅が‼」
衣類!!
蜂蜜まみれのあの手を見ればわかる
それにこれまで見た感じゼロツーは興味のある相手とじゃなければつるまない
そう、今のゾロメは丁度いいところにオシボリが近づいてきた程度にしか思われていないのだろう
哀れなりゾロメ!!

そんな二人を横目に俺は食事を続ける
今日もサラダが美味いな
ゼロツーは俺の視線に気がついたのかお皿を持ちながら席をたち、俺の方へ歩いてくる
「甘くて美味しいよ。一緒に食べよ♪」
そして俺の椅子に…正確には俺の膝の上に座った
「――‼」
桜色の長い髪からするいい匂い
蜂蜜とはまた違った甘い匂い
それが鼻腔を刺激する
何故か心拍数が上昇するのを感じる
なんなのだろう…これは…

「なぁ、ゼロツー。俺はあのときしっかりストレリチアに…フランクスに乗れていたのか?」
指についた蜂蜜を舐め取るゼロツーに尋ねた
そしてフフ…とだけ優しく微笑むとゼロツーは俺の顎を指で撫でながら答える

「ちゃんと乗れてた。素敵だったよ？ダーリン♡」
耳元で囁かれ、ゾクゾクと体が強張る
び、びっくりした…
カツンッ…
食器とナイフが当たる音が静寂に響く
「「「「「「だ、だーりん？」」」」」」
「って、なに…？」
「私も知らない…」
「ってか!!俺様のことを無視するなよ!!」
自然と頬が緩む…
そうか…俺はやっぱ飛べてたんだ‼
少し微笑んでいるだけの俺…
だが内心めちゃくちゃ喜んでいた
すると突然、ゼロツーは食器を置くと体をこちらへ向けてきて、向かい合うような形になる
「ぜ、ゼロツー。近い…」
「ボクは、これくらいがイイんだけどなぁ？いいでしょ？ダーリン♡」
ガチャッっと、ドアが開かれる音をする方に全員、視線を向ける
新しい来訪者。それは俺達の世話係。ナナが入ってきた
「はーい、そこまでよ!!」
バンッっと持っているタブレットで俺の頭を叩くナナ
「痛ェッ!!」
知ってるか？タブレットって金属製なんだぜ？
そんなので殴ったらダメでしょ!!
あの胡散臭い七賢人（猿共）に教わらなかったの!?
俺達も彼奴等には教わってないか…
というか、今の悪いの絶対ゼロツーでしょ…
「あっ、ナナさん!!」
なんとガーデンのときから引き続きＡＰＥのパラサイト管理官として来たらしい

ゼロツーは蜂蜜まみれのものを食べさせてくる…
しかしこれが嘘偽りなく案外行けるのだ
ちなみにフトシがチャレンジして見事にダウンしていた

「それとゼロツーは基本あなた達とは別行動よ」
「え～」
驚いたな…
蜂蜜まみれの朝食よりもナナが管理官なことよりも
そっちのほうが驚いた
「ナナさんもう一度確かめたいんです…ストレリチアに乗せてください」
「それは貴方に決められることじゃないわ」
むぅ…やはりか…
「貴方にもおって賢人(パパ)たちから指示が出るから大人しくしていてちょうだいね？」
そう言うと、この場を去っていった
少し変な空気だけを残して…

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：ゼロツー

ナナとゼロツーの移動中
「勝手な行動を取られては困るわ…」
「ダーリンと食事してただけだよ」
不満気にボクは返す
もうすこし、ダーリンといたかったな…
「パラサイトたちとの接触は控えて…あの子達には貴女は刺激が強すぎる」
「この中は息が詰まるなぁ…」
見つめる先はオトナたちが生活する黄金色に輝く街だった

Side：ゼロツー　out

Ｅｐｉｓｏｄｅ．４

Ｓｉｄｅ：イクサ

「それにしてもあの叫竜相手によく戦えたよな。戦ってるときどんな感じだったんだ？」
ゴローが聞いてくる
「それは俺も気になるな…聞かせてよ‼」
「はは…ヒロまで…実を言うと感覚が残ってるだけであまり覚えてないんだ…」
「そっか…だとしてもお前が残ってくれて俺は嬉しいよ‼」
ゴローはそう続ける
２人は俺の目を見ても怖がらなかった人たちだ
だからこうして話していられる
ドン‼と後ろから何かがぶつかる感覚があった
「俺はお前が俺たちより先に乗ったなんて認めてねぇからな‼この眼帯野郎‼」
「そうかよ!!勝手にしろチビ助!!」
「な、なんだとォ!!」
狭い更衣室の中でゾロメはイクサを追うが、その身体能力の差は大きく一瞬で着替えたイクサの勝ちで終わった

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：女子組

「あぁもう‼なんでこんなにきついのよ‼」
「コネクトするときの感覚…早くなれるといいなぁ…訓練機とは全然違うよね…ひゃ‼」
ミクがココロに抱きついてくすぐる
それに耐えられなくなり笑い声を上げるが

イクノが制止する
「やめて…思い出しちゃうから…」
「そんなにキツかった？確かに少し変な感じはあったけど…私は安心する感じがしたかな…」
「さすがは二桁組のエリート様‼」
「ヒロくんとの相性もいいのかもね‼」
「私もイチゴくらい数値が高かったらな…」
「そういえばあのイクサ‼女の子連れて戻ってきたと思ったら『ダーリン♡』だなんて‼結構あの２人相性いいんじゃ…」
バァン!!とイチゴがロッカーの扉を思いっきり閉める
その力があまりにも強すぎたのか、扉は拉げてしまっている
そのままイチゴは不機嫌そうに出ていった…

Ｓｉｄｅ：女子組　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

開かれる巨大なハッチ
５機のフランクスが姿を表す
ＣＯＤＥ：０１６（ヒロ）・ＣＯＤＥ：０１５（イチゴ）機　デルフィニウム
ＣＯＤＥ：６６６（ゾロメ）・ＣＯＤＥ：３９０（ミク）機　アルジェンティア
ＣＯＤＥ：０５６（ゴロー）・ＣＯＤＥ：７０３（ナオミ）機　イフェイオン
ＣＯＤＥ：２１４（フトシ）・ＣＯＤＥ：５５６（コロコ）機　ジェニスタ
ＣＯＤＥ：３２６（ミツル）・ＣＯＤＥ：１９６（イクノ）機　クロロフィッツ

第１３部隊は現在、この５機から編成されている
前衛職が２、後衛職が３と、バランスが取れている
他の部隊とは違いそれぞれ、専用機の用な感じで形状が大きく異なっている

みんな楽しそうだな…

俺は訓練機を使って駆け回る
「もう一度…ストレリチアに乗りたい…」
一人で訓練を続ける…
ゼロツーの視線に気づきながらも…

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イチゴ

「コネクトのときのコツがね…もう少し…」
肩を並べて話す私とヒロ
そこを通り過ぎる紅い少女
その少女…ゼロツーに問いかける
「ねぇ‼なんでイクサなの？」
ゼロツーは少し頭に？マークを浮かべながら返す
「イクサ…それってボクのダーリンのこと？」
「またその呼び方…あのとき叫竜を倒してくれたのには感謝してる。でもこれ以上イクサに近寄るのはやめて欲しい」
「なんで？」
「貴女はウチの部隊じゃないから…どうせいなくなるならイクサに変な期待させないで欲しい」
ゼロツーはイチゴに近寄る
「イチゴ…やめといたほうが…」
「ヒロは黙ってて‼」
ついピシャリと言ってしまった
ヒロはシュンとしてしまう
「へ～…キミ、ダーリンのなんなの？」
「この隊のリーダーだよ」
「ふーん…」
スンスンと私の匂いを嗅ぐゼロツー

そしていきなり頬のあたりを舐めた
「ひゃ!!」
思わず変な声が出てしまう
そこに運悪く現れるイクサ
「なんだ、ゼロツーと仲悪いのかと思ってたけど仲良さそうで良かった」
「なっ!!ちがっ…!!」
その言葉をいい切る前に
「あ!!ダーリン!!自主トレーニング見てたよ?意外と筋肉付いてるんだね、カッコよかったよ♡」
「そんなとこ見なくていいよ…」
そんなことをいいながらイクサはゼロツーに連れて行かれてしまう
しかし、ゼロツーはこちらに振り返り小走りでこちらに近づいてくる
「あ、そうそう…甘いね…嫌いじゃないよ。」
そんな事を私の耳元で囁く
「あ、まってダーリン」
とイクサに腕を絡ませて立ち去るゼロツー
私は無性に腹がたったしゼロツーを羨ましく思った

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ

Ｅｐｉｓｏｄｅ．５

Ｓｉｄｅ：１３部隊

「俺たちちゃんと戦えるようになるのかなあの叫竜ってやつと…イクサがやってたみたいに」
とフトシはボールをゾロメにパスする
「はぁ？言っとくがあれは乗ったうちに入らねぇよ。あんな眼帯つけてて動かせるわけ無いだろ？」
と今度はゾロメがフトシに返す
「でも実際動いてたじゃん。賢人（パパ）もイクサのこと気にかけてたみたいだし…」
そこにミツルが口を挟む
「聞けば…あのゼロツーという女性操縦者（ピスティール）…一人でもフランクスを動かせる特殊体質なんだとか…二人も見たでしょう？あの四つ足の形態。つまりイクサはあれに乗せられていただけの話ですよ」
「ほらみろ!!アイツに先越されたなんて俺はみとめねぇからな!!って……あ？」
ゾロメの視線の先…
噂をすればなんとやら…イクサが偶然通りかかった
「あんまり調子こいてんじゃねぇぞっと!!」
思い切りボールをイクサの方へ蹴飛ばす
直撃は免れないかと思われたが…
本来、死角である右側だったが、まるで見えているかのように、片手で受け止めた
「なんだよ…、俺に構ってる暇あったら少しくらい研鑽を積めば？」
フトシの取りやすいパワーでボールを蹴り返す
それをしっかり、胸で受け止めパス回しを再開するフトシ達
「あのバケモノ女に乗っけてもらっているだけのやつがなにを…」
そうゾロメが言葉を溢した
しかし、それがいけなかった

バキッと鈍い音を立て、ゾロメはそのまま倒れ込む
顎にキレイに入り、脳が揺らされてしまったのか、なかなか立ち上がることができないまま、自分に一つの影が近づいてくることを視認することに精一杯だった
イクサはゾロメの胸ぐらに掴みかかり、無理やりにでも立たせた
「あのさぁ…俺のことをいくらでも言うのはいいんだけどさぁ…」
音を聞いて、慌ててヒロ、イチゴ、ココロ、ナオミ、ゴローが飛び出してくる
その場にいる全ての人間が恐怖した
「ゼロツーの事を…俺の恩人の事を貶すな!!」
ドスの効いた低い声
そして、彼の晒されている左眼で睨みつけられてゾロメも、睨まれていないフトシですらも腰を抜かしてしまう
その後ナナより連絡がありその場は収まった

Ｓｉｄｅ：１３部隊　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「これより、実機使用による模擬戦のチーム決めを行う。今回はイクサの参戦は決定しているわけだが…誰かイクサとペアを組む者はいるか？もしくはイクサの対戦ペアも決めておきたい」
その言葉に反応したのか、ゾロメが大きく手を挙げ立候補する
「はいは～い!!俺とミクがやります!!　イクサ!!てめぇのことなんてボコボコにしてやるよ!!」
「イクサ、構わないか？」
俺は首を縦に振り承認する
どうせ、ゾロメが来ると思ってたよ
「さて、残りはイクサのペアだが…」
「ボクがやるよ」
振り返ると、紅いパラサイトスーツを身に纏ったゼロツーだった

「ゼロツー!!」
俺が目を輝かせたときだった
「ダメよ、ゼロツー。貴女はまだ13部隊配属じゃないんだから」
「じゃあ、私がやります!!」
そう名乗りを挙げたのはイチゴだった
イチゴか…これ絶対私情もりもりだからあまり巻き込みたくないんだけどな…
「決まりだな、それでは準備にかかれ!!」
ハチの声が響く
それが体を奮い立たせ、一瞬で戦いのための空気に変わる
「よし、やるか…」

Ｓｉｄｅ：イクサｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イチゴ

「やい‼イカレ野郎‼これで白黒つけてやるからな⁉」
「優秀なリーダーさんでもそのパートナーじゃ勝っちゃうかもな‼」
そんな感じで、イクサはズタボロに言われてるけど特別、気にしてなさそう
これでイクサと繋がるのは2回目…
「ごめんね？面倒なことに巻き込んじゃって？」
「いーよ…そんなことよりイクサは一つになることだけを意識して？」
「了解…」

大丈夫…私でもイクサの力を引き出せ…

ドクンッ‼っと心臓がいきなり跳ね上がり、心拍数が上昇するのを感じる
ポンプが握りつぶされたかのように、グングンと血液が早く廻り体

温が一気に上昇し、汗が体を滴る
なにこれ…？
なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ
？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ
？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ？なにこれ？

体が内側から壊れる
頭の中に流れ込む知識、記憶、そして…彼の意識
「あぁああぁぁああぁあああぁぁ!!」
侵食される脳内
同調(コネクト)の終了と同時に、絶叫する
見覚えのある少年と赤い肌の少女

少年はあることを少女にいう

「今日から僕は‼■■■■■■■」

ブツンッ‼っと音をたててイチゴは深層心理から開放され、気絶する

その瞬間、空気が震える

「Ahaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!」

その叫び声と同時に、蒼いFRANXX(フランクス)は…
デルフィニウムは…
暴走(スタンピード)モードの、怪物(バケモノ)へと変貌していた

Side：イチゴ out

Ｅｐｉｓｏｄｅ．６

この場にいるすべての者が感じる
あの紅き獅子の再来なのだと
違うとすれば全身は蒼くそして一対の尾を持ち合わせている”龍”であること

「Ａｈａａａａａａａａａａａａａ!!!!」

劈く龍の咆哮
それは姿は彼の叫竜を連想させる姿

「お、おい!!なんなんだよこいつ!!どうなってるんだよ!!」
「わからない!!けど今は止めるしかないんじゃない⁉」

突然の変化にたじろぐゾロメとミク
しかし、彼らの身に容赦なく爪は振り下ろされる…!!

◇

「ＣＯＤＥ：０１３のためにか…？」
「ですが…現在ＣＯＤＥ：０１５に意識はありません‼」
「ならば…彼が…一人で…」

フランクス博士は興味深そうに…
ひとりでに嗤っていた
その状況をまるで楽しんでいるかのように…

◇

模擬戦専用の警棒型の鈍器…

それで応戦するアルジェンティア
しかし爪による斬撃…長い尾による刺突…
武器とはいえども所詮は模擬戦用
耐えられるわけもなく初撃は受けきれたが追撃の刺突で真っ二つにへし折られる

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”」

アルジェンティアが殴打されるたびに喉が潰れるほどに叫ぶミク
一歩、後ろに退いた…瞬間、アルジェンティアの腕をデルフィニウムは食い千切った
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!」
先程よりも遥かに大きな声で苦しみを露わにするミク
「ミク!!ゾロメ!!ソイツは無理だ!!一旦退け!!」
「そうしたいけどよ!!距離を離せない!!」

「イクサのバカ野郎…なにイチゴに負担かけてんだよ…」
普段、一番冷静な判断をしているゴローだが誰も知らないところで一番苛立ちを覚えていた

◇

Ｓｉｄｅ：イチゴ

「う…うぅ」
頭の痛みと、右眼に違和感を覚えながら体を起こす
目の前のモニターにはグチャグチャにされていくアルジェンティアの姿
そしてコックピット内はむせ返るような鉄の匂いと、紅くなった壁、そして前と後ろからは耳を塞いでも絶え間無く聞こえてくる断末魔

私は思考を巡らす
後ろ…？
後ろには誰がいる？
恐る恐る振り返り様子を伺う
目に写ったのは…
「イ、イク…サ？」
眼帯が外された右眼からは血涙が流れ、本来白目である部分も紅く染まっている
それだけではない…
口からも、鼻からも鮮血を流しながら狂う少年の姿
「モットダ!!モット寄越セ!!オ花ガ咲クヨ？ボ、ボク…赤好キ!!ア、ア、蒼ハドコ？逃サナイ!!潰レ…ロ？キヒッ!!ボク？ワタシ？キミ？オレ？護ラナキャ?!コ…壊ス!!ボクガキミノ？ナンダッケ？マァイイカ？イマハ楽シク!!ナッ!!ナッ、ナナッ、嬲ラナキャ!!壊レチャエ？」
彼の瞳からはいずれ、一筋の涙が零れ落ちる
血涙と混ざって、桜色の涙が流れる

「たす…けて…」
その言葉でハッとする
彼が自分のことを話すことはあまりないことを思い出す
そうだ…
ずっとそうだ
目の前の少年
彼の瞳に映るのは狂気　苦しみ　怒り　そして……大きい悲しみ……
「ハァ…全く、見た目はすっごく変わってるのに、内側は全然変わってないね…いっつも一人で抱え込んで、いっつも一人でどうにかしようとして…」
イクサがストレリチアに乗ったあの日
私の視界の端に写ったキスと呼ばれるその行為

それの意味も知らないけれど…
私は…
彼の血で真っ赤になったこの狭い空間で…
彼を抱きしめ…
彼と唇を重ねた…

Ｓｉｄｅ：イチゴ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「アレ…イチ、ゴ…？」
優しくほほえみ、俺の事を抱きしめるイチゴ
「おかえりなさい、イクサ…小さい頃にも言ったよね？一人で抱え込まないでって…少しは頼ってよ…」
その声は震えており、ギュッと抱きしめる力が強くなる
「ごめんね…とりあえずここから出ようか…」
ぐっと力を入れ立ち上がろうとする
しかし、立ち上がれずにそのまま倒れ込む
「あ……れ……？動けな…い？」
「イ……イクサ……？」
体は動かなくなり、だんだん体温が冷たくなる
あぁ…寒いな…
目の前には泣き崩れるイチゴ
本来であれば不可能である男性操縦者（ステイメン）単体でのＦＲＡＮＸＸ（フランクス）の操縦
さらにその状態での暴走（スタンピード）モード
反動に寄る出血多量
すべての情報を処理する脳のオーバーヒート
様々なダメージにより俺の体は限界を迎えていた…

Ｅｐｉｓｏｄｅ．７

Ｓｉｄｅ：イクサ

あぁ……これは夢だ……

冷たい水の中…

流れに抗おうと、上に向かって泳ぐ

しかし、前には進めない

唐突に、後ろからギュッと抱きしめられる感覚がある

振り返るとそこには、白い肌に桃色の髪の毛、そして２本の紅い角の少女

その表情は柔らかく俺に向かって微笑んでいた

ゼロツーは俺を追い抜かし、上へ上へと登っていく

『ゼロツー!!待って!!俺にはキミが必要なんだ!!』

手を伸ばせど届かない

光の指す水面へと登ろうとする

しかし、唐突に肩が掴まれる感覚

それと同時に、ゼロツーはモヤのように消え、光は消えてしまい周りは真っ暗闇になる

そして俺の肩に手を添えているであろうモノから声がする

『やめておけ…アレはお前を壊すだけだぞ？』

ギリッっと歯ぎしりを鳴らしながら俺は肩にかかった手を振り払い後ろを振り返る

『誰なんだよお前!!お前に何がわか…ッ!!』

『誰？とは、面白いことを聞くんだな』

そんなはずはない

俺は全身から吹き出るように汗が流れる

なんなんだよ…

なんなんだよコイツは…ッ!!

『見ればわかるだろう？お前は、私なんだから』

ニヤリと嘲笑う顔

髪は黒く、白い眼帯を左眼に着け、晒されている右眼は鈍く青色に光っている

その体つきは女性そのものである

その姿はまるで、全て反転させたような

俺自身であった…

◇

「うわぁぁぁぁぁ!!」

驚きのあまり俺は声を挙げながら起き上がる

しかし、目の前にあったミクの頭にゴツンッ!!と音をたてながら激突してお互いに頭をおさえる

「痛ッいわねぇ!!なにすんのよ!!」

「わ…悪い…」

鼻腔にツンと突き刺さる消毒の匂いと、ピッ…ピッ…と一定のリズムで刻まれる電子音

そして自らの腕から伸びた2本の透明なチューブ

その元には薬品の入った袋と紅い液体が入った袋が一つずつ

その中身は絶えず俺の内側に入り込んでくる

点滴…

それに輸血か…

つまりここは…

「医務室の中…か…」

置いてあった果物のバスケットを漁り、目ぼしいものを見つけたのか取り出し口元に運ぶミク

俺はミクに催促し、みかんを向き食べ始める

「それにしてもお前が俺の看病してたのか?俺はてっきりお前には嫌われてると思ってたけど」

「別にアンタのことが心配でやってるんじゃなくて、ただ当番制だったからよ」

照れくさそうにそっぽを向いてしまう

「だとしてもありがとう　助かったよ」

「な、なによ!!いきなり!!全く…そ・れ・と、あんたもうちょい早く眼ぇ覚ましなさいよ…私の前イチゴだったんだから私より心配してたわよ」

「なるほど少しは心配してたのか…」
　ミクは俺と話しながらお茶を飲んでいたが、俺の言葉とともに口に含んでいたお茶を吹き出した
「ゴホッ、ゴホッ…そこなの?!じゃなくて…後でイチゴにも顔だしなさい」
「ん、わかった。あとさ…悪かったなその腕…」
　俺は包帯の巻かれたミクの右腕を気にする
「大丈夫。精密検査を受けたけど誰も骨は折れてなかったわよ。アンタ以外ね…」
「俺骨折れてる?」
　とくに身体に違和感は無いが…
　その言葉に俺のことを信じられないようなもので見つめると俺の腕を掴む
「アンタ、まさかなにも感じてないの?」
「あぁ…問題なく動くけど…」
　そうするといきなりミクは俺の腕に巻かれた包帯を外し始めた
　そしてペタペタと触って俺の腕が折れてないことを確認する
「ホントだ…ありえない方向に曲がってたのに…完全に治ってる」
「そろそろいいか?」
　不思議そうに腕を触り続けていたミクだったが、俺の言葉にハッとしてか、慌てて腕を離す
「そういえばさ、俺…どんくらい寝てた?」
　真剣な面持ちでミクに尋ねる
「4日間くらいかな?とりあえず賭けは私の勝ちね」
「おいこら　不謹慎なことで賭け事してんじゃねぇよ」
　なんで人が何日で目覚めるかで賭けしてるんだよ
　泣いちゃうよ?俺
「あはは‼アンタもそんなことというのね。ハーおもしろ」
「いまのに面白い要素なんてあったか?」
「とりあえずアンタが起きたってことみんなに伝えてくるから」
　そういい、扉を開けて駆け出すミク

寝っ転がって天井を見る
そういえばもうすぐで８年くらいか　名前をもらってから…

◇

～８年前～
「名前？」
「僕　自分で自分の名前つけてるんだ!!僕はヒロ!!」
「どうして私がイチゴなの？」
「ＣＯＤＥ：０１５。１５（イチゴ）だから!!」
「それが私の名前…」
　向かい合う少年少女
　そこの輪に入るもうひとりの少年
「なにしてるの？」
　そこに現れたのは黒い髪に、右眼を眼帯で覆った少年
「今ね!!ヒロに名前を付けて貰ったの!!」
「そっか、よかったね」
　ニッコリと優しく微笑む眼帯の少年
「ねぇねぇ、ＣＯＤＥ：０１３もヒロに名前つけてもらったら？いいよね？ヒロ!!」
「うん!!もちろん!!ＣＯＤＥ：０１３だから…イッサはなんか違うし…」
「イクサ…、イクサなんてどうかな？」
　イチゴは眼帯の少年の腕を引く
「イクサ…か…。いいなまえだね」
　他のコドモたちも集まり、『名前を付けて』と彼らにねだる
　そこに遅れてもう一人…
　一人の少年がやってきた
「僕にも…名前付けて…」
「ふふ、僕で大丈夫ならいいよ」
「うん…!!イクサに付けて欲しい!!」

あれ…？この子は…誰だっけ…？

Ｅｐｉｓｏｄｅ．８

Ｓｉｄｅ：イクサ

プランテーション内部都市
そこで俺は精密検査を受けていた
折れた腕は５日で治っていたという
俺の身体がおかしくなってるのかな？

検査室を出るとそこにはイチゴがいた
「終わった？」
「うん　どこも異常ないってさ治癒能力は異常って言われちゃったけど」
「そう…よかった」
ホッと安心したように胸をなでおろすイチゴ
「イチゴは平気？」
イチゴの顔が赤い気がする
「私は…なんとも…」
「イチゴ？やっぱりなにかあるんじゃない？顔が赤いよ？」
イチゴのおでこと自分のおでこを合わせて違いを感じる
少しだけ、熱を帯びてる感じがある
今度は脈を取ろうと手首を触る
「こっちはちょっと早いかな？」
「へ…平気だってば…」
もじもじと恥ずかしそうに顔を赤らめるイチゴ
触っていると、イチゴの脈がどんどん早くなる
「イチゴ　準備して」
ナナの声でアナウンスが入った
後でナナにも伝えておこう

Ｓｉｄｅ：イクサ

◇

Ｓｉｄｅ：ナナ

「あの子と乗ってここまでダメージが少ないのは初めてね…」
「デルフィニウムとのコモンコネクトは失敗、そして一人で暴走させたが…ストレリチアとのコネクトのときは意識がなかったとはいえ、適応している」
「考えられるのは…」
　先日の戦闘データを眺めている
「「特殊検体…」」
　私とハチは声を合わせていう。
「男性操縦者（ステイメン）単体でＦＲＡＮＸＸ（フランクス）を動かしているのだからそれ以外考えられないでしょうけど」
「気になるのはやはり『眼』だな…」
「ええ　第７部隊にいたときのデータもある」
　これまでの死亡者リストを見る
　そこには、無理やり開かれた瞳の写真
　その全ては、本来白目の部分が、ありえないまでに紅くなってしまっている
　それは充血の域を優に超えていた
「彼と乗って廃人になった、女性操縦者（ピスティル）も死亡した女性操縦者（ピスティル）も同様に右眼の本来白目の部分が紅くなっていたそうだ」
「最近、イチゴも彼と乗ったときから少し痛いと訴えています」
「七賢人（ババ）の言っていた…魔眼の呪いか…」

「彼はどうなるのかしらね…」

Ｓｉｄｅ：ナナ　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ：イクサ

「お前たちコックピットでなんかあった？」
「なんで？」
　ゴローがそんなこと尋ねてくる
「いや　イチゴが模擬戦のあと変だったからさ…」
「ちゃんと見てんだな。アデっ」
　コツンと軽くゴローが小突いてくる
「そういえば　さっき会ったときにはなんか恥ずかしそうだったな…あとちょっと怒ってるみたいだった」
「ははは、アイツ昔からお前のことになるとすぐムキになってたからな」
「イチゴが？」
　そうだったんだ　初めて知ったな…
「ただでさえ少ない十番台…兄妹みたいなもんだろ？俺も含めてヒロとイチゴとお前で４人一緒だったからな。お前はあとから入ってきたけど特別クラスから４人揃って此処に配属されるのも奇跡みたいなもんだし」
　兄弟…兄弟…
「兄妹か…そうだよな…あいつ手のかかる妹みたいだもんな」
「お前が言うのかそれ？」
　もう一発ゴローが俺にチョップする
「悪いゴロー。お前からイチゴは悪くないって言ってくれないか？」
「そりゃ構わないけど…イクサお前これからどうするんだ？」
「もっかいゼロツーと乗れないかお願いしてみようかな…」
　俺の発言に顔を青くし俺の肩に掴みかかった
「もう1回って…お前あの子のウワサ聞いただろ？」
「３回以上ゼロツーと乗ったら死ぬ…だっけ？所詮、噂は噂だろ？」
「あの子と一緒に乗ったやつがどうなるのかお前見たんだろ!?」
「見たよ？死んでた」
「だったら‼」
「だったらなに？俺は死ぬ覚悟はできてるし…もし俺がゼロツーとしか乗れないのなら…俺にそれ以外の道は無い」

その金色の瞳の内に秘めた決意

「俺たちはＦＲＡＮＸ（フランクス）に乗るために…戦うために生まれて来たんだから…」

ｓｉｄｅ　イクサ　ｏｕｔ

Ｅｐｉｓｏｄｅ．９

Ｓｉｄｅ：第１３部隊

「結局さ、イクサがパラサイトになれるっていう話、どうなったのかな？」

ホールに集まった少年少女のうちの一人、フトシが疑問に思ったことを口に出す

「微妙なんじゃないかな…暴走（スタンピード）モードだったとはいえ、しっかり動かしていたけど…」

その問いにナオミは顎に手をあてながら答える

「あんなん駄目に決まってんだろ？ただ一人で暴走（スタンピード）モードで暴れてただけだ!!」

そこにゾロメが意見するが…

「その相手にやられたのもどうかと思いますけどね…」

そこにミツルが嫌味を言う

「あ？あれはな、ミクがパニクってちゃんと動かないからで…!!」

それにゾロメが反発し

「はぁ!?アンタだって、まともに動かせてなかったじゃない!!」

ミクはすかさず言い返すが…

「あ？知らねーよ、お前の調子が悪かったんだろ」

「信じらんない…イクサのほうが幾分ましだわ…」

「はぁ⁉なんで俺があんな奴に負けなきゃ行けねぇんだよ‼」

「喧嘩は駄目だよ？数値に響くよ？」

２人の仲裁にココロが入る

「でもさ…乗るのにいちいちリスクを抱えるパラサイトをこのままパパが置いておくとは思えない…」

イクノが冷静な見解を示す

「そうだよな…施設ではそうやって次々みんな消えていった…」

「悲しかったよね…」

「それにしてもさ、イチゴもイチゴよね～、リーダーの癖にイクサに肩

入れしすぎよね…あれじゃあパートナーのヒロが可哀想よね。ヒロもよく我慢できるわよね」
「ヒロは関係ないでしょ？」
そこにいきなり現れるイチゴ
それにびくっと驚くミク
「俺がどうかした？」
「なんでもないよ。イクサがパラサイトなら大きな戦力になるでしょ？イクサの様子見たでしょ？」
「そりゃぁ…」
思い起こされるのは意識が無かったとはいえストルリチアを駆けていた姿

そして数日前の暴走（スタンピード）させた龍を駆るその姿

「パラサイトなら…でしょ？」
「まだ十分可能性がある…今回乗ったとき…前回より負担が少なかった気がする」
「アンタであんなんになってたんだからアタシじゃ無理だし…」
「でもストルリチアには乗れた…たとえ意識がなくてもあれだけの動きをして…私達を助けてくれた…私はそう信じてる。」
しばらくの沈黙…そしてその静寂を破るのはミツルだった
「イチゴ…イクサをかばう気持ちはわかりますが…意識が無かったイクサは乗せられてただけに過ぎませんよ」
「でも!!別にそうと決まったわけじゃ!!」
「確かに!!イクサは特別でした二桁組の中でも飛び抜けていましたから」
すくっと立ち上がりミツルは演説を始める
「みんな思っていましたよ!!イクサはヒロとともに道標になってくれると!!でも現実は違った。彼はパラサイトに成れなかった…」
みんなを見回して冷たく言い放つ
「あの頃のイクサはもういないんです。あんなイクサはもう見たくな

いですから…」

side　13部隊　out

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１０

Ｓｉｄｅ：イクサ

「つっかれたぁ…」
セラススの外周を１０週　そしてハチに頼んで作ってもらった筋トレメニュー
そして訓練機でのハチとの模擬戦
正直言って身体が追いつかない
サッとシャワーだけ浴びミストルティンへの帰路へとつく
その道中にいたのはゼロツーだった
「ゼロツー？こんなところにいたら風邪引いちゃうよ？」
そう言いながら角をじっと見つめる
「ダーリンのえっち…」
「はへ？」
いきなり言われたその言葉に驚きを隠せず間抜けな声を出す
「そんなにジロジロみないでよ」
「あぁ、ごめん。そんなに嫌だったか」
「ふふふっ…いいよパラサイトってちょっとえっちなほうがむいてるって博士が言ってた」
「その博士、大丈夫なのか…？」
んんーっと伸びをして待つゼロツー
「待っててくれたんだ…ありがとね」
「どういたしまして。そんなことよりも早く行こ」
「何処行くの？」

◇

ゼロツーに連れられて、真っ白な廊下を前へと進む
そして、１つのゲートに差し掛かる、ゼロツーは手元で操作し、入っていってるけど…

たしかこの先って…
甲高い警報音が鳴り響き、俺の身体を阻む
「俺達、コドモはいける場所が制限されてるんだよ。こっちの方は…だいたい立入禁止だったんじゃないかな…」
『ふーん』っといいながら手のひらを見せつけてくるゼロツー
「なッ!! Ｓクラス ＩＤ!?」
初めて見たな…
ゼロツーは、こちら側へと戻ってくると俺の両手をとり、身体を合わせた状態でゲートへと進む
それって、俺通れなかったら、グシャって激突して終わらないよね？
そう信じたいところだけど…
しかし、ゲートはいとも簡単に通ることができた
「通れた…？」
「ね？簡単だったでしょ？」
ニッコリと笑って見せるゼロツーはこちらを見つめてくる
「さ、行こ」
そのまま手を引っ張られて連れられていく
白い道を進んでいくと、三角の扉が開かれる
その先には…
「すご…」
目の前に広がるのは黄金の街
「こんなすごいところ、来たばっかりなのによく知ってたね」
「どこも作りは似たようなものさ。面白いところでもないよ」
「そうなんだ…」
ちょっぴり退屈そうにいうゼロツーの方を見る
相も変わらず桜色のキレイな髪に、街の金色が映り、より温かい印象を与えている
その姿とは裏腹に、声は少し冷たい
「それでも、俺はトリカゴの他にはちょっとしか知らないから…少し新鮮でいいな…」

俺は再びゼロツーの方に目を向ける
「なにまたジロジロ見てるの？」
「キレイだなって…」
ゼロツーはそっぽを向くと、柵をまたいで細いワイヤーを支える橋へと向かっていった
「危ないよ？」
「ボクらさ…どうせ死んじゃったらそんなこと関係ないじゃん？　見なよ、この死んだような街をここには空も海もない…ドコにも繋がってない行き止まりの街」
……確かに、ヒトは行き交ってないし、この光もキレイではあるけど何か味気ない
空っぽな街だ…
「よっと…」
俺は柵から身を乗り出し、ゼロツーのもとまで歩いていく
俺の行動にゼロツーは目を見開き驚いている
うわ～、それにしても高いな…
「ちょ、ダーリン!!危ないって!!」
「ゼロツーがそれを言うの？」
「で、でも…」
「俺は、ゼロツーが何を見ているのか見たくなった…それだけだよ」
ゼロツーは少しうつむくとパッとこっちを向いてきた
「ねぇダーリン…逃げちゃおっか、ボクと一緒に。ボクならダーリンを連れ出してあげられる」
「あははッ、いいかもね。胡散臭い賢人（パパ）達からも、いつも色々言ってくるパラサイトからも…」
その返事が想定外だったのか、ゼロツーはくすっと笑うと、アクロバティックに俺のことも柵のことも飛び越えてもとに戻っていく
「なーんつって、もしかして本気にしちゃった？ダーリン」
むーッ!!
一杯食わされた…
「してない!!」

「え～？ほんとに？」
「してないったらしてない!!」
　このあと、ゼロツーにはすごいからかわれた

◇

「本部より、作戦指示があった」
「も、もう実戦ですか…？」
　フトシが心配そうに言う
「そう心配しないで。最初っからこの間みたいのと戦うわけじゃないから」
「良かった～」
　ミクの安堵の声が聴こえてくる
「本来なら、時間を掛けたいのだけど…そういうわけにもいかないの…」
　コンラッド級がたくさん湧いているとかかな…
「コンラッド級という叫竜だ。サイズはＦＲＡＮＸＸ（フランクス）より一回り小さい。叫竜たちはマグマエネルギー反応に引き寄せられ出現する」
　そこは、昔に座学でやったところで見たな
「これが最近、ＤＰ（キンコウ）―Ｌｖ．０８最深部に出没して被害を与えている。自動防壁システムも追いつかない状況だ。」
「それと今回、ストレリチアの出撃はないわ」
　なにっ!!といいたいところだが、コンラッド級で手こずっているようじゃダメって意味なんだろうな
「このあと、この１３都市は、貴方達だけで守っていかなければいけない。今回の叫竜を駆除できないようなら、この先、叫竜と戦っていけないから心して作戦に当たるように。現場の指揮はイチゴとヒロに任せます。」
「はい」
「以上だ、各自搭乗準備」
　俺は今回…なにもできないか…

悔しい、それに…
なぜか胸騒ぎがする。
なにもないといいんだけど…

◇

「クロロフィッツは残る、他４機で向かってくれ」
『了解です』
「少し、厳しいわね…」
早速のアクシデント、作戦行動には急遽、デルフィニウム、アルジェンティア、イフェイオン、ジェニスタの４機で当たることになった
「どうしたの？体調でも悪かった？」
「いえ、そういうわけでは…」
「いいわ、イクノは以前から不安定なところがあったわね、一応明日検査しましょ？」
「あの、僕達のパートナー適正になにか問題でもあるんじゃないでしょうか？」
ミツルがつっかかるようにいうが、そういうわけじゃなさそうだけどな…
「初めは割りとあることなの。これくらいでパートナーを解消したりしないわ」
「…そうですか」
不満そうにミツルはしている
『叫竜目視しました。各機展開。配置完了…作戦開始します!!』
情報は中継されて常時こちらへと送られてきている
まず、イフェイオンがエーデルモルガーンで、矢を放ち串刺しにしたところを、デルフェニウムがエンビチョップ追撃
その後、ジェニスタがルークスパロウで突き上げ、その後アルジェンティアがナイトクロウで止めを刺した
『やった!!』
ヒロたちは喜んでいるが…

浅いな…
恐らくコアまで攻撃が届いていない
アルジェンティアが再び止めを刺そうと向き直したところ…
頭に取り憑かれ、攻撃を受ける
マズい、あのままじゃミクが…
ミクは意識を失い、アルジェンティアは動きを止める
すかさず、デルフェニウムがコアを砕いたが…
上からもう一匹同じ形の叫竜が落ちてくる
『なッ…!!もう一匹いたのか!!』
それだけなら良かった、しかし上からはもう一匹、また一匹とどんどん叫竜の数が増えていく
「マグマエネルギーの放出で、おびき寄せられたか…」
「イクサの言う通りだけど、あまりにも数が多すぎる」
「ほら見なよ～最初っからボクを出しとけばよかったのに。」
聞き覚えのある声が後ろから聴こえてくる
その声の主はゼロツーだった
ごめん、気が付かなかった…
「貴女…」
「いいの?あの子達みーんなやられちゃうよ?」
それは、ダメだ…
「俺とゼロツーに救援に向かわせて」
『それは無理だ』
モニターからのハチの声でそっちを向く
『正式な男性操縦者(ステイメン)でない者に、搭乗許可は与えるわけにはいかない』
あのときなんでサボったんだ俺…!!
今になって後悔しても仕方がないけど…
「そんなこと言ってる場合じゃないんじゃない?またここの部隊、全滅しちゃうよ?」
ぴょんぴょんっと、軽快な身のこなしでナナに近づくゼロツー
「さっさと、ボクを…ダーリンと乗せろよ…!!」
「出撃は認められない」

それがナナの答えだった
「イクサがダメだったら、僕が行くしかないんじゃないですか？」
「ミツル…」
「確かに、いまストレリチアを出さないとみんなやられてしまいます。この場に男性操縦者（ステイメン）のパラサイトは僕しかいない。だったら僕が行くしかないでしょう？」
「ストレリチアは普通のフランクスとは違うの、同調（コネクト）に慣れていｎ「大丈夫ですよ」…ッ!!」
ナナの言葉の間にミツルが割って入る
「そこのイクサにだって乗れたんです。それならこの僕にだって乗れないはずはない。」
そう自慢げにいうが…俺は同調（コネクト）ができないんじゃない
同調（コネクト）したあとに代償があるだけ。
しかし、俺の話は詳しく聞いてないようなのか、単に忘れてるだけなのかは知らないけど俺は同調（コネクト）自体には慣れている方だと思う…
ナナは少し考えたあと…
「ゼロツー、ミツルと乗れる？」
「はぁ…聴こえなかったのかなぁ…ボクはダーリンと乗りたいって言ったんだよ。ダーリンもそうでしょ？」
確かに俺も乗りたい
でも、安全性を最優先させるならミツルのほうがいい
それでも、俺は…
「俺も乗りたいです…」
「ね？言ったでしょ？わかったなら早くダーリンを乗せなよ」
『いや、規則は規則だ…ＣＯＤＥ：０１３を連れて行け』
え？
ハチはなにを言ってるんだ…
その瞬間、ドアが開かれ多くのオトナたちが入ってくる
ざっと数えたが、１０人はいる
コイツらもしかして俺を別のところへ連れて行く気か…？
全身の毛がよだつ

向かってくる人間を相手取る
1人から銃を奪い取り、鉛玉を撃ち込む
残り、9つ
銃撃を、死体を盾にしながら前へと進む
しかし、四方から囲まれる
「クソッ!!」
ゼロツーとかイクノとかの事に流れ弾がいかないかが心配で思うように動けない
とりあえず、死体のポケットからナイフを取り出し1人を斬りつけながら真後ろの相手に2発銃弾を放つ
残り7つ
しかし俺は気が付かなかった
オトナはこの場に8人いることに…
バチッっと、背中に電流が走り、身体の自由が奪われる
視線を向けると、ナナの手にはテーザーガンが握られていた
薄れゆく景色の中、ゼロツーは渋々ミツルとデッキの方へと向かっていった
「ごめんね、ダーリン…」
そうゼロツーの声を最後に、俺は意識を手放した

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：ゼロツー

なんでこんなことしてるんだろう
あの子達が死んだら、きっとダーリンが悲しむと思った
だから、こんな奴と乗った
でも今は気持ち悪くてしょうがない
身体の内側を直接手でかき回されているみたい…
コイツの意識は、ダーリンよりも自分が優れていると優越感に浸りたいだけだ

それでも、ダーリンのためにも…
ボクのためにも叫竜を狩らないと…
「みなさんは、下がっていてください!!」
『はえ?その声ミツルか?』
『その場はストレリチアに任せて、全機その場から退避』
『了解!!』
面倒事はボクに任せっきりかよ
「へへっ…すごい…!!力がみなぎってなんでもできそうだ!!パートナーでこんなにも違うなんて!!やっぱり僕には問題は無かったぁ!!イクサにだって負けはしない!!イクサ!!見てますか!?快調ですよ‼僕なら気を失うことなんてしない!!思いの通り動かせる!!なんならこのまま、僕がパートナーになってもいいですよ!!僕達、最ッ高のコンビになりそうじゃないですかァ!!」
ダーリンのこと、ここまで言うんだぁ…
下卑た笑い声も気持ち悪い
ハァハァと肩をつかってする呼吸も気持ち悪い
なにより、ダーリンとはあった心地よさがない
不愉快だ…
なら、コイツがもうボクとは乗れないようにすればいいか
「へぇ…そうなんだぁ…じゃあ、ちょっと本気出してみよっかな…?」
「へ…?」

Ｓｉｄｅ：ゼロツー　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「目、覚めた?」
「ん、イクノ?」
目を覚ますと、イクノの膝の上に頭をのせ寝かせられていた
あれから、どれくらい経ったんだ…
時計を確認するが

まだ３０分も経っていない
「イクサにはいつも驚かされるわ…オトナが食らっても３日間は動けないテーザーガンを直撃したのに数十分で目を覚ますだなんて」
「ナナ…」
「ごめんなさいね、あんなことして」
「別にいいよ、立場上とかしょうがないんだろうし」
モニターに目を向けるとストレリチアが戦闘中だ
「さて、車の準備もできたみたいだから、みんなを迎えに行くわよ」

◇

「ミク、大丈夫だった？」
「へ、平気よ。これくらい…」
「そっか、良かった」
みんなも大丈夫そうだ…
ほんとにみんな無事で良かった
しかしまだ、ストレリチアの姿が見えない
おっ、ちょうど上がってきたところだ
頭部のハッチが開かれゼロツーが中から出てくる
ゼロツーはこちらに気が付いたのか軽快に各部をつたって降りてきた
「ただいま、ダーリン!!」
ギュッっと抱きしめられる
その体は暖かい
「やっぱ、ダーリンが一番心地いいね」
「どうしたの？いきなり、あとちょっと苦しいかな」
『ごめんごめん』と離れると一回ストレリチアの方をちらっと向くと再び俺の方へ向き
「なんでもない!!」
とにっこり笑ってみせた
しかし、俺は気が付いた

……ミツル

そのあと、変わり果てたミツルを見た

噂はほんとうだった…

それでも俺は、キミと戦うと誓った

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１１

Ｓｉｄｅ：イクサ

「悪魔…アイツは悪魔だ…　あんな奴と乗るだなんて正気じゃない…殺される…!!」

「どう？」

「ご飯も手を付けてないよ…もったいないから俺、食べちゃおうかな…」

「それお前が食いたいだけだろ」

「そんなことないよ!!」

「戻ってきてから、ずっとあんなだぜ…」

ミツルはあれからずっと、ゼロツーを怯えているようだった

俺も、これまで見てきた

ゼロツーと乗って死んだ男性操縦者（ステイメン）も、俺と乗って死んでいった女性操縦者（ピスティル）も…

俺はミツルの方へと歩み寄り、ベッドの周りのカーテンを開ける

「ミツル、ゼロツーとなにがあったか教えてくれないか？」

「なにか…？だって…？」

よく見えないが、こちらを睨みつけるように目だけをこちらに向けてくる

「あの女は僕のすべてを吸い取ろうとしたんですよ。血も、肉も、魂も…!!なにもかも…!!最初は普通だったんだ…でも途中からは僕を…殺すつもりで…」

ガタガタと震え、力を込め、うずくまり小さくなるミツル

魂ねぇ…

「ミツル、大丈ｂ「しかも、アイツ!!笑ってた!!」」

ぐっと俺の胸ぐらをつかみ、更に鋭い視線をこちらへと向ける

「笑ってたんですよ!!」

「ミツルくん!!」

「おい、落ち着けって!!」
呼吸が荒くなり、大粒な汗を欠きながらも、掴む力も一段と強くなっていく
「もう一度乗ればそうなる…貴方もそうなりますよ…　自分だけは特別だと思っているのならおめでたいにも程があるッ!!」
声を荒らげて、俺に向かって怒鳴る
「落ち着けってほら、ちゃんと寝てなきゃ」
フトシに連れられて、ベッドへと再び横たわるミツル
俺は、医務室を出て中庭へと向かう
『俺もそうなる』…か……
確かにゼロツーは未知数だ
俺が次乗ったらああなってしまうのかもしれない
でも…
それでも…
「俺は決めたんだ…」
前に進み続けるって
誰にも聴こえていないだろう俺の独白が、長い廊下に小さく響いた

◇

「まだあの子と乗りたいと思ってる?」
壁に寄りかかってたところにイチゴが近寄ってくる
「私はあの子のこと、どうしても信用できないんだ。ミツルのあんな状態見たらなおさら…」
俺は、淡々と話し続けるイチゴを横目に、足元にあるボールでリフティングをする
「パートナー殺しの噂がもし本当だったら、イクサ…あと2回乗ったら死ぬかもしれないんだよ?」
「これまで沢山の人が俺と乗って死んできた。俺と一緒に戦うために…俺のことを信じて、結果がわかっていても。死にたく無くても死んでいった。俺も、ゼロツーと一緒に戦いたい。だから俺はゼロツーを

信じる。俺だけ死にたくないだなんて、そんな虫のいい話なんてあるわけ無いだろ…？」
　ギュッと言葉を握りしめて唇を噛みしめるイチゴ
「覚悟…できてるんだ…　わかった。だったらもう止めない。」
「イチゴ…？」
「私もリーダーとして、覚悟決めなきゃ…」
　そういうと、俺の前を通り過ぎていく
「覚悟…か…」
　そんなかっこいいものじゃないよ…これは…

◇

『本都市は、第２６都市とのキッシングのため、移動形態に移行します。繰り返す、本都市は…』
　ビービーと警報音が鳴りながら入るアナウンス
　キッシング…
　それはプランテーション同士でマグマ燃料の受け渡しを行う事
　このエネルギーに連られて、叫竜が出てくる可能性もあるとのこと
　だからそれまでにストレリチアに乗れるようにしないといけない
　自主訓練を終えた俺はタオルで汗を拭い、スポーツドリンクを飲んでいた
　運動後は身体が熱くなっているため冷たい飲み物を飲みたくなるが、急激な体温の低下は体に良くないとのことでぬるいものを貰ってきたのだが
　やはり正解だったな
　じんわりと身体に水分が吸収されていくのを感じる
　それがただひたすらに心地いい
　帰り道にはデッキを通ることになるのだが、ストレリチアの前にはゼロツーが立っていた
　なにをしているのかな…
　物陰から様子を伺ってみる

しかしこちらの視線に気がついたのか、ゼロツーはちらっと、こちらの方を見てきた
「なにみてたの？ダーリン」
やっぱり見つかってた…
「なにか、考え事してたから邪魔しないほうがいいかなって」
「ふふふ、なにそれ、へんなの～」
ゼロツーは腕を絡ませてくる
彼女の胸が俺の腕に当たり、彼女の心臓の鼓動が伝わってくる
ゼロツーって温かいな
やっぱり女の子って体温高いのかな…
ゼロツーもイチゴもミクも手が温かいイメージがあるんだよなぁ
「ねぇねぇ、ダーリン。このあとなにするの？」
「あ～、風呂でも入ろうかなって。訓練してて汗かいちゃってさ…」
「ふーん、そっか」
「？」
ニヤニヤと、何故か笑ってるゼロツーを横目に、俺はミストルティンへと戻っていった

◇

「あ～…」
いい湯だ…
全身がふやけ、疲れが取れていくのを感じる
少しずつ、ハチの考えたトレーニングメニューにも追いつけるようになった
しっかし、疑問なのがランニングが訓練機ではなく、生身で行うということだ
なんでだろうなぁ…
トレーニングメニューに疑問を持ちながらも湯から顔を出す
それにしても、『パートナー殺し』の噂が本当なら…か…
そうしたら俺が乗れるのは2回だけ

それしかゼロツーと一緒にいられないんだ
寂しいな…
カラカラカラと、扉が開く音が聞こえる
この時間帯ならヒロかゴローかな
そう思い、音のした方へと視線を向ける
しかし、何ということだろうか、そこにいたのはゼロツーだった
「来ちゃった♡」
「うぇッ!!な、なんで!?いまお風呂入ってるんだけど!!」
ジャブジャブと服を来たまま、こちらへと向かってくる
いや服脱がれたら困るけどさ…
せめて靴下脱ごうよ
そんな事を考える
そうでもしないとショートしてしまいそうだから
「ねぇ…ダーリン?一緒にここを出よう?弱っちい奴らなんて放っておいてさぁ…ダーリンさえいてくれればそれでいい。ボクのパートナーはキミだけだ」
飲みやすいように、甘く溶かした麻薬のような声
一度浸ってしまえば元には戻れなくなってしまう甘美な誘い
ゼロツーはこちらへと紅い双角を向けてその距離を近づけてくる
「それともキミもやっぱりボクのこと…バケモノだと思ってる…?」
キッと睨みつけるように翡翠の瞳をこちらへと向けてくる
「馬鹿だなぁ…ゼロツーは…」
そう思ったことが全く無いといえば嘘になってしまう
でも、それでも俺は彼女のためにともに戦いたいと思っている
「そんなわけ無いじゃん」
その回答にポッとゼロツーは赤くなり
「そ、そう…?ならいいんだけど…」
とりあえず出てほしいんだけどな…
このままではのぼせてしまいそうだ…
頭が虚ろになってきてフラフラする
しかし、それは一瞬でかき消される

警報音がこの大浴場にも響き渡る

この鳴り方は…叫竜だ…!!

「さぁ!!行こうかダーリン!!」

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１２

Ｓｉｄｅ：イクサ

タッタッタッタッ
っと、長い廊下を駆ける俺とゼロツー
しかし、身体能力の差が大きく、ゼロツーはどんどん俺を離していく
「ぜ、ゼロツー…待って…」
ゼロツーはこちらを振り返ると俺のことを抱える
「しょうがないなぁ、ダーリンは♡」
そういうと、一気に加速していく
「はやっ!!」
風で、髪は持っていかれそうになる
すこし、窓の方に視線を向ける
アレは…輸送機…？
しかし、開かれたハッチにはほとんどなにも入っていない
なに積んでたんだアレ…
まさか…
「着いたよ」
扉を開けると、ナナが立っており、戦況を見守っている
「敵はコイツ一体か…？」
「今のところはね…」
こちらをちらっと振り返る
「スーツに着替えたところで、ストレリチアは出せないわよ」
「ボク、なんにも言ってないのにな～」
戦況をともに見守っているが…
二体目も出てきた
完全に分が悪いな…
「ほら～、ボク達も出たほうがいいんじゃない？」
「それはできない」

「ちぇっ…ケチ」
そーだそーだ!!
ナナのケチ!!
「ところでさ、さっき入港した輸送機…誰が乗ってるの…？」
ふたたびハッチが開くと、そこには複数のオトナが立っていた
「ＣＯＤＥ：００２…一緒に来てもらおう」
「お迎えよ。大人しく従ってちょうだい。ゼロツー、貴女には前線に戻ってもらいます。もちろん、１人でね」
「はぁ？戻るって…」
「急げ、ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）が叫竜をひきつけている間にここを出たい」
１人が、ゼロツーの肩に手をかけたときだった
「触るなッ!!」
バンッっとゼロツーがそれを払うとそいつは部屋の壁まで吹き飛んでいった
「おいッ!!」
ゼロツーにレーザーポインターが当てられ、銃でロックオンされていることを示している
「ゼ、ゼロツー…」
「ダーリン。時間切れみたいだ…」
ゼロツーは俺に歩み寄ると、その両手で俺の頬を撫でる
「ダーリンとなら、うまくいくかもしれないって思ったんだけどなぁ…キミと一緒になりたかった…」
悲しそうな顔を浮かべる
そんな顔しないでくれ…
俺は…
「でも、ここでお別れ…」
コツンと俺の額に角を当てる
その角は固い、けど不思議と痛くなかった
「ゼロ、ツー…」
「バイバイ。」
「来い」

連れて行かれるゼロツー
このままで…
このままでいいのか…？

◇

「イクサ、これは賢人（パパ）たちが決めたことよ。」
「だから…？」
「あの子は賢人（パパ）たちのために前線で戦わなくちゃいけない特別な女性操縦者（ピスティル）なの。そして、そのパートナーとなる男性操縦者（ステイメン）にもそれ相応の負担がかかる。覚えておいて、あの子は貴方達、普通のコドモとは違うの…」
「人間じゃないってことか…？」
「端的に言えばそういう事ね…」
そんなわけがない。あの子は…
ゼロツーは…
俺と同じ…
同じだけど違う…だから…!!
「ナナ、先に謝っておく」
「え？」
駆け出す
今ならまだ間に合う
「ゼロツーッ!!」
「なッ!!何だこのガキ!!」
邪魔だッ!!
銃を奪い取り、目の前にいるオトナを撃ち抜く
ゼロツーと俺の邪魔するやつは全員敵だッ!!
「待てッ!!」
数だけは多い…
追い詰められたら終わりだな
俺は渡り廊下に出ようとする。しかし…

ビーッっと警報音を鳴らし、俺の行く手を阻む
「やべぇ…!!」
「やっと追い詰めたぞ…」
ここからゼロツーまでは、これくらいなら届くか…？
「ゼロツーッ!!俺は、君を見たときわかったんだ。自分のやるべきこと。今、なにをするべきなのかを!!君を初めてみたとき、絶対に忘れられない!!瞼の裏に張り付いた君の姿は、これまで見てきたどんなものでも美しかった!!君もはぐれて1人の俺と一緒だと思っていた。けど違う!!君には俺にはない進む力がある!!君となら、この戦場(おおぞら)を飛べるんじゃないかって。いつか本で読んだ比翼の鳥みたいに…気が付いたんだ、俺はFRANXX(フランクス)に乗るために生まれてきたんじゃない。君に出会うために生まれてきたんだッ!!だから…行かないでくれッ!!ゼロツーッ!!」
そうすると、ゼロツーは歩みを止めた
「なに言ってるんだ、このガキ…殺す…!!」
俺には、10をゆうに超えるレーザーポインターが向けられている
「おい、止まるな」
「かえれなくなっちゃったなぁ…」
でも大丈夫…
彼女なら応えてくれる
ゼロツーは飛び上がり、後ろの人間から銃を奪う
俺は、足元に落ちた銃を足で手元まで一気に蹴り上げる
後ろの強化ガラスに何発も打ち込みながら降りてくるゼロツー
少しでもやりやすいように、俺もそこに向かって銃弾を撃ち込む
そうするとゼロツーは、ガラスを蹴破る
俺はゼロツーが落ちてくるであろう場所へと向かいそのまま抱きかかえる
さっきゼロツーにされたみたいに
え…ゼロツーってこんなに軽いの…？
「あんな恥ずかしいこと言われたの、初めて」
「とっさだったから…で、でも後悔はしてない」

「ボクに乗りたいんだ？」
「うん…乗るよ」
「もーいっかい」
ゼロツーは耳に手をあてて催促する
あぁもう…今日は濃い一日だってのに…
「俺をストレリチアに、いや君に乗せてくれッ!!」
ニシシッっといたずらっぽく笑うと俺の手を取る
「それでこそ!!ボクのダーリン!!」
この前みたいに身体を合わせ、セキュリティを抜けていく
「クソッ!!待てッ!!」
「ぜってぇ、ぶっ殺す」
「ハッ!!やってみろよバーカッ!!」
テンションが完全にぶち上がってしまっている
でも、楽しいからいいや!!
俺は先程の銃で照明を打ち抜きガラス片で、接近を拒む

◇

「どりゃあッ!!」
俺とゼロツーの飛び蹴りに寄って、オトナをなぎ倒した
ストレリチアもすぐそこ
階段を一気に駆け上がりストレリチアへと乗り込む
「ふたりとも、今すぐ降りなさい!!」
「ボク、ダーリンと出撃するよ」
「だからナナ言ったでしょ？先に謝るって」
「そんな事許されるわけ…!!」
といいかけたところで通信を強制切断…
こりゃ帰ってきたら、２時間は説教コースだな
「どうしたの？ダーリン」
「動かせるかな？俺でも」
「できるさ!!ボクとダーリンならね!!」

「……そうだね」
俺はゼロツーにここまでやってもらったんだ。
だから、俺はゼロツーを信じるだけだ
「準備はいい？」
「……もちろんッ!!」
君とならッ…!!
バァーンっと『クイーンパイク』で輸送機をぶち抜く
「さぁ!!飛ぼう!!ダーリンッ!!」
ストレリチアはスラスターを吹かし、大空へと飛んでいく
それはまるで、逆行する流星のように
「俺、乗れてるッ!!ストレリチアに!!ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）に!!」
「そう、これがダーリンの力!!」
お互いが溶け合い、肉体の境界を超え一つになっていく
「ボク達、相性ぴったりなんだ!!でも、まだまだこんなもんじゃないよ!!」

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イチゴ

「クソッ!!」
完全に全機が、叫竜の囚われていた
「このままじゃ…」
脳裏に浮かぶのは、いつも笑いかけてくるイクサ
嫌だ…死にたくない…
私はイクサみたいに覚悟なんてできてない
なんだよ、リーダーとしての覚悟って
結局は見栄を張ってただけなんだ…
「助けて、イクサ…」
『うん、今助ける…!!』
瞬間、全身に走る衝撃

そこには、紅いFRANXX(フランクス)の姿があった

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ：イクサ

『イクサ…なのか…?』
『すげぇ…』
「こっちのトゲトゲのは任せろ、もう片っぽのほう任せていい?」
『ダメッ!!今回、ストレリチアに頼るわけには…』
「俺だって、チームの仲間だ。俺はみんなに背中を預けた。だから、俺にも背中を任せてくれないか?」
『わかった、あっちのは任せて、だからそっちも頼んだ』
「あぁ…任されたァッ!!」
相手からの弾幕を弾き、口元へとやりを投げる
「こっちに…来い!!」
繋がったワイヤーを引っ張りそのままトリガーを引く
「手応えがない…」
「コアはドコにある…」
噛みつかれて、そのまま投げ飛ばされる
マズい、離された…
「逃がすかッ!!」
地中に逃げた叫竜を追いかける
よし、掴んだッ!!
「どりゃあぁあぁあああぁぁぁあぁぁあ!!」
グイッっと引き上げると、地中から叫竜の全貌があらわになる
なんと、イチゴたちが相手していたやつと繋がっていたのだ
しかし、暴れまわりみんなを吹き飛ばす
『誰か動き止めてよッ!!』
『だったらッ!!』
エンビチョップを引き伸ばし、一気に身体を貫く

『みんなもッ!!』
全員が、各々の武装で、地表に貼り付けにして抑え込む
『イクサッ!!お願いッ!!』
「ゼロツー…いける?」
「よゆー!!」
口ではなく尻尾だった部分から逃れ、尻尾をそのまま、地面に突き刺す
一気にとび、本来の口元…
みんながいる方へと向かう
『イクサッ!!』
イチゴとイクノの声が重なる
「一気にケリを付けるッ!!」
「あぁ、いくよダーリンッ!!」
二人の横を通り過ぎ、叫竜の体内へと侵入する
「うおおぉおぉぉおおおぉぉおぉぉおおぉ!!」
眼前に、蒼い水晶体が見えてくる
「捉えたッ!!」
コアの破壊と同時に叫竜の身体が崩壊する
それによって蒼い爆煙が立ち込める
唖然として、こちらを見るみんな
「ふぅ…お仕事完了ッと…」
俺は、空を見つめる
ずっと、空を飛ぶことを願っていた
不可能だと思っていたけれど…
それでも、飛ぶことができた
例の話が本当ならば、俺が空を飛ぶのはあと一度だけど
だとしても、俺はそれを全力で羽ばたくだけだ…

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１３

Ｓｉｄｅ：イクサ

第２６プランテーション（都）『クリサンセマム』と第１３プランテーション（市）『セラスス』のキッシングが始まった

みんなはその様子を見に行っているようだけれど、俺は今それどころではなかった

「貴方は昔からそう、言うこと聞いたかと思わせといて逃げ出したり、『さっき謝ったから』と言って命令違反するし…」

そう…

ナナに正座させられて説教をされているのである

２時間で終わりと予想していた説教はもうすぐ3時間に突入しようとしていた

「足痺れた…」

「貴方のその自由奔放さを見習いたいくらいね…」

「いやぁ…それほどでもないかな～」

ゴツンッ!!

「褒めてないわよ」

痛い…知ってますかナナさん…

金属製のタブレッドで殴られるとありえないくらい痛いんですよ？

つーか、すごいデジャブ感がある

「でも…貴方のおかげで、イチゴ達の今がある。ありがとね」

恥ずかしそうに、そっぽを向きながらいうナナ

そうか、俺はイチゴたちを守れたのか

そう思うと、少し心が軽くなった気がする

ゼロツーの噂が本当だったら、俺はあと一回

でもミツルのように、全身から血が吹き出すようなこともなかった

案外嘘だったりなんて思ったりもしたいところだけど

胸のアレのせいで自分に異変が起きていることも感じ取ってる

さて…どうしたものかな…

◇

セレモニーは、盛大かつ厳粛に行われた
第２６プランテーションからも、ＦＲＡＮＸ（フランクス）部隊のコドモたちが出席していた
そんな彼らは、俺たち第１３部隊よりもずっと落ち着いた様子を見せていた
これが経験の差と言うやつなのだろうか
ゾロメもアレくらい大人しくなってくれればいいのに
そうミクが呟いているところを聞いてしまい笑いを堪えるのが大変だった
ミクよ、俺もそう思う
『諸君!!悍ましい叫竜たちはマグマ燃料を狙い大挙して襲ってくるだろう!!両都市の運命はパラサイト諸君にかかっている。君たちは強い!!必ずや勝利をもたらしてくれると信じている!!』
これまで、忌み嫌われ、遠ざけられてきた俺が、これだけ歓迎されると嬉しい気持ちももちろんある。
でも少しだけむず痒い気がするな…
高揚しているようであるが、それと同時に、大きな戦乱が刻一刻と近づいてきていることを思い知らせているような気がした

◇

翌朝
「おーい、朝だぞ、起きろ～」
声が聞こえる
この声は…ゴローか…？
「朝だって、早く起きないと遅れるｚ…ッ!!」
俺は、ゴローに触られて、初めて身体を起こす

やば…この間よりも、悪化してる気がする…
身体は、内側から燃えるように熱く、汗の量も尋常じゃない
しかし、今はみんなが頑張ってる
俺の不調で崩すわけにはいかない
「とりあえず、着替えろよ」
「ん、そうする」
洗面所へと向かい顔を洗う
お湯にしたつもりだったのに冷たい…
そのせいで、一気に頭が冷え意識が覚醒していく
「お前、さっきすごい熱だったぞ？」
「あ～、なんか嫌な夢見てたからじゃないかな。驚いてたんだろ」
適当な嘘だがゴローは俺が悪夢をよく見ることを知っているから
まぁ、誤魔化せるだろう
少し心が痛むけどな…
「お前、意外と身体弱いからな」
「うるせーよ、最近は別に平気だし。なんなら今すぐ叫竜を殲滅しに生きたい気分かな」
「す、すげぇな…」
これは嘘ではない
ゼロツーはなにやら叫竜を殲滅するのになにか目的があるみたいだし
それの手伝いができるなら戦いたいけどな
「まぁ、あんま無理すんなよ？」
「わかってるって」
「ほんとにわかってるのか？お前は昔っから無理ばっかするからな。ちゃんと俺たちのこと頼れよ」
イチゴと同じこと言わないでよ…
「気が向いたらそうするよ」
「おまっ…気が向いたらって…」
ため息をつくゴローを横目に俺はみんなのいるホールへと向かっていった

◇

「昨日のセレモニーすごかったね。私興奮してしばらく寝付けなかったもの」
「向こうの部隊のリーダーの人、いい人そうだったよね～」
そうか？絶対俺たちのこと下に見てるだろ
いや気の所為だったらいいんだけどさ
ミクの逆鱗に触れたくないから言わないけど
一回第２６部隊にはお世話になってるからな
ＣＯＤＥ：０９０からしてみれば俺は仲間の仇みたいなものだからな
「ミクはああいう人と乗ってみたい？」
ミクはその言葉に、俺の方を一回ちらっとみると慌てたように
「う、ウチの男子に比べたらマシよ。そう思わない？ナオミ」
「どっちでもいいかな」
「えー、じゃあイクノは？」
「別に、興味ないから」
「おっ硬いこと…」
イクノは興味ないことはとことん興味ないもんな
でも、興味のあることはずっとやり続けてるからすごい根気があると思う
ちなみにこれを本人の前で言ったら分厚い本で殴られた。
しかも角で…
あの時は頭かち割れるかと思った
「それにしても、オトナたちに期待されると気持ちが高ぶるよな～」
「うん!!俺たち必要とされてるんだ」
「諸君!!君たちは強い!!必ずや勝利をもたらしてくれると信じている!!」
ゾロメは立ち上がり、演説をしていたオトナのモノマネをする
ちょっぴり似てるのが面白い

みんなもふふふっと思わず笑ってしまっている
「そして、その勝利をもたらすのはオレだッ!!」
自信満々に言い切るゾロメ
「それを言うならイクサでしょ？」
しかし、イチゴが俺のことをあげる
「えぇ…？俺ぇ…？」
「確かに、そうね。この間の戦い大活躍だったもの」
「でも、調子の方は大丈夫なの？」
「あ～、調子はいいかな。なんともないよ」
その言葉にミクは安堵したかのように
「この様子だと、３回殺しの噂は嘘みたいね」
「異常に相性がいいか…ね」
「ははは、ありがと」
でも、きっと勝てたのはみんなのおかげだ
この間の戦闘で感覚は掴んだ
まだ腕に感触も、身体の中にゼロツーが入り込んできた感覚も残ってる
まだまだ俺はみんなに経験で劣っている
だから、もっともっと頑張らないと…
そうすると時計が７時を指し、鐘が重く響く
「ごはん!!」
謎のご飯といい続ける歌を歌うフトシを先頭に俺たちは食堂へと向かう
「ねぇイクサ、ちょっとまって」
「どうしたの？」
パチン…
首元を触られて驚いてしまい思わずイチゴの手を払ってしまった
「あ、悪い…痛くなかったか…？」
「ううん、へーき。襟が崩れてたから直そうと思って。一言言えばよかったね」
「あ、ありがと」

「全く、昔っからダラしないんだから」
　ゴローもイチゴも今日は痛いところばっか着いてくるな
「この間の戦いさ、私のやりたいことよくわかったね」
「まぁ、付き合い長いし」
「イクサなら、なんとかしてくれると思った」
「信頼してくれてるんだな」
「まぁ、ミスしたら後で説教するつもりだったけどね」
　うわ、ナナの説教の前にイチゴの説教が追加されるところだったのか
「おっかな」
「なんかいった？」
「イエ、ナニモ？」
「それでさ、その時の…「あ、ダーリン、おはよ!!」
　イチゴの話を遮ってゼロツーが話しかけてくる
「おはよう、ゼロツー」
「こっち」
　ゼロツーはそれだけいい、俺の手を引っ張る
　あれでも、こっちの席って
「女子の席じゃん…」
　しかも、ココロの席だし
「ゴメンな、ココロ。すぐ移るから」
「気にしなくても大丈夫だよ。私があっちに移ればいいだけだからね」
「そっか…なんか悪いな」
　なんて優しいんだ
「さぁ、早く席について、お祈りの時間よ」
「七賢人（パパ）の喉が渇かないように、七賢人（パパ）の心に未来永劫まで平穏が訪れますように、いただきます…」
「「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」」」
　いつも思ってたんだが、このお祈りって意味あるのか？
　ゼロツーに関しては我関せずでいつもどおり蜂蜜たっぷりの食事

だ
「はい、ダーリン。あ～ん♡」
「う、うん。あ～ん」
「どお？美味しい？」
「うん、甘くて美味しい」
「ボクの分全部食べていいからね」
　それは流石に食べきれないかな…
「いいな～俺もやってもらいたいな～」
「パートナーに頼めよ…」
「え～？それなら相手はココロちゃんみたいなカワイイ子が…ってあぁ!!」
　ココロはフトシにあ～んしていたのだ
　なんで目の前でやってて気づかなかったんだ…？
「えへへ、真似っ子」
　フトシはなんとも幸せそうな顔をしている
「なーによ、すぐ影響されちゃって!!」
「ヒッ!!」
　ミクの鋭い眼光がゾロメに突き刺さる
　ゾロメってつくづく可哀想だよな
「イ、イクサ…あ～ん…」
　そんな事を考えていたら、イチゴがこちらに向けて林檎のジャムが塗られたパンを差し出してきた
「なッ!!イクサ!!あーん!!」
　イチゴに触発されてか、ミクはブルーベリーのジャムが塗られたパンを口に突き刺してくる
「どう？美味しい？」
「もがもが…」
　お二人さん、せめて1つずつにしません？
　窒息しそうなんですけど
　あのイチゴサン…満足したならいいんですけど助けてくれませんかね

助けを求めようとイクノの視線を向けても何故か睨まれたし
ナオミに視線を向けても苦笑いされて目を背けられた
その様子を見てゼロツーはずっと腹抱えて笑ってたし
みんなひどい…

◇

「ここではね、起床する時間なら、入浴する時間も、睡眠する時間も全部規則で決められている。その日の服も食事もすべてが用意されてるんだよ」
「ふーん」
「この森のすべてが俺たちパラサイトの数値調整に造られてる」
「そらに蓋がしてあるのも？」
「さぁ？でも、雨は降るんだ。天井になっている部分から水が降ってくるんだよ」
ぱぁ…っと顔を明るくすると
「なにそれみたい!!やってみて!!」
「ハハハ、俺じゃできないんだ。そこらへんはオトナたちが決めてるからね」
「ヤダ、いますぐ見たい。やってよ」
「今度タイミングがあったら、一緒に見よっか」
「うん、そうだね」
「じゃあ次はこっち」
ゼロツーの手を引き、俺の部屋へと案内する
「それにしても、なんでいきなりここを案内してほしいだなんて言い出したの？」
「ん？なんでって…ボクもここに住むつもりだからさ!!」
バムッバムッっとゴローのベッドの上で飛び跳ねるゼロツー
「え？」
「え？」
「えええええええええええ⁉」

ゾロメのリアクションが耳にキーンと来る
「なんで女子がここにいんだよ!!男子棟に入ってくんなよ!!」
「あぁ、悪い。俺が入れたんだ。すぐ出るよ。行こゼロツー」
「うん、今行くね」
タッタッタッと俺たちは駆け足でその場をあとにした

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イチゴ

「しばらく、ゼロツーがここにとどまることになったわ。賢人（パパ）たちから許可が出たの。」
「じゃあイクサも正式なパラサイトに？」
「そっちはまだ調整中。まぁ多分そうなるでしょうね」
リーダーとして大事な話があると言っていたので来てみたら
ゼロツーの第１３部隊付きとイクサの正式なパラサイト認定が仮決定したとのこと
やった。
これでイクサと一緒に戦える
それでも、ゼロツーとはうまくやれる気がしないけど
でも、イクサがゼロツーのこと抑えてくれるはずだから…
「イチゴ、ゼロツーとはうまくやってね」
ナナ姉は私の心情を察してかそう言葉を投げかけてくれた
頑張らないとな
部屋から出るとゴローが出迎えてくれていた。
「なぁ、今日のイクサ、どう思う…？」
「そうね、あんなに楽しそうなイクサは久しぶりに見るかな」
「あぁ、でもさ、もし無理に明るく振る舞ってるだけだったら…」
イクサはそんな事しない…
確かに、独りで抱え込もうとする癖はあるけどその時は決まって余所余所しくなる

あと普通に嘘が下手
だから平気だと思うけど
「イクサがそういったの？」
「いや、素直に話す正確じゃないだろアイツ」
確かに話しはしないけどさ
「お前からも…!!「ゴロー」…ッ!!」
「イクサの心配もいいけど、ゴローは、自分たちのことちゃんと考えないと」
「どういう意味だよ…」
「次の戦いはこれまで以上に厳しくなる。パートナーのゴローがそんなふわふわしてたんじゃ、ナオミも全力出せないと思うな」
「おう…」

◇

「この部屋は好きに使っていいから。」
「ダーリンと一緒がよかったな～」
「しばらくここにいるつもりなんでしょ…？だったらルールは守って、特別扱いはしないからね。それと、イクサのことよろしくね。」
彼女…ゼロツーが使うであろう部屋のベッドを整える
イクサのことしっかり守ってもらわなきゃだから…
「そんなの言われるまでもないよ。ダーリンはボクのモノなんだから」
ズキッ…
「イクサは誰のものでもないよ。」
「キミって偉そう」
「それはどうも…」
ダメだ。イクサが、この女と仲良くしてると心が痛くなる。
最近じゃ、イクサはミクとも仲が良さそうに見える
もう、ほんとうに無理だ…

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

胃が握りつぶされたかのように、口から胃酸が吹き出す
それをサッと流し、汚れた口元をキレイにするために顔を洗い、鏡で自分の顔を確認する
「ハハッ…ひっでぇ顔…」
外された眼帯
隠されていた右眼は、金色に鈍く光っていた
しかし、今はその色は薄れている
なんでだ…
ズキッ…ズキッ…
と、思考しようとした瞬間、鼓動するたびに痛みが全身に走る
その原因は間違いなく胸のコレのせいだ
はぁ…
あと一回
せめて最後まで…
戦いきらないと…

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１４

Ｓｉｄｅ：ゴロー

第２６部隊の人たちと話してきた
なんでもそれぞれ機体が違うのはウチの第１３部隊くらいらしく、ボディも武器もほとんど同じなんだとか
キッシングは彼らの方が経験がある
作戦の詳細とかも彼に任せたほうがいいのかもしれないな
そんな事を考えつつ自室の扉のドアノブへ手をかけると内側からなにかうめき声のようなものが聴こえる
なにが起こっているんだ…
まさか…
開けるとそこには胸を押さえつけ蹲るイクサの姿があった
「イクサッ!!」
彼の呼吸は荒く、汗は尋常じゃないほど汗をかいている
「おい、イクサ、どうしたんだよ…」
「？……ゴローか、なんでも無いよ…」
意識が朦朧としているようで、会話はできなくはないが言葉がとぎれとぎれになっている
「なんでも無いわけあるかよ!!怪我でもしたのか…⁉」
イクサの身体を見ようと制服のジッパーを開ける
そこには、蒼い繭のようなものが胸にこびり付き、彼の体調不良や痛みの原因がコレであるとわかるまでに、そう時間はかからなかった
「いつからか？ゼロツーと乗ったときからか…？」
彼は視線を落とし、なにも喋らない
しょうがない、誰か呼ぶしか…
そう思い、端末を取り出し連絡を入れようとする
しかし、彼に端末を奪われ、その上俺の端末を握りつぶした
「あ”ぁ…ぐッ…」
胸が痛むのか呻くイクサ

仕方がないから水を注ぎ飲ませる
イクサはコップを受け取ると、口の端から水が溢れるのをお構いなしに一気に飲み干す
しかし、それもやっとのことなのか、むせてそのまま血を吐き白いシーツを紅く汚す
「イクサッ…もうストレリチアには乗るな…」
「ゴローには関係ないだろ…俺が勝手に命張ってるだけなんだから」
「次乗ったらヤバいのわかってんだろ!!」
「俺さ、最近楽しいんだ…ゼロツーと乗った日から、イチゴともっかい繋がった時は失敗しちゃったけどでもそのあと、みんなのこと助けることもできたし。特にみんなが近くにいると温かいな、オトナのためじゃなくて、みんなのために戦いたいなって思うんだ。こんなに楽しいのは初めてだ。次の作戦は絶対に失敗したくない。最期になるかもしれない戦いで負けるわけにはいかない…だから…」
「俺に見逃せっていうのか…?」
「うん…」
「だれにも言わないつもりなのか…?」
「うん…」
「イチゴやヒロにもか…?」
「うん…」
「くッ…お前ッ!!」
悲しそうに、弱々しくそう答えるイクサ
振り返りそんなイクサに掴みかかろうとする
しかし、先程までいた場所にはもういなく
立ち上がって笑っていた
「こんな重荷を背負わせてしまって悪いと思ってる。でも俺になんかあった時、みんなを頼む。特にイチゴとか、俺がいなくなったらどうなるかわからないからさ」
やめろ…
そんな顔するなよ…
なんで…

なんでお前はそんな状態でも笑えるんだよ…
「じゃあ、またあとで…」
イクサはそれだけいうと扉を開き去っていく
「イクサ…お前は、大バカ野郎だ…」
俺しかいなくなった狭い部屋で俺の声だけが虚しく響いた

Ｓｉｄｅ：ゴロー　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「イクサ、ゼロツー、急いで作戦会議に遅れる」
「わかってる。」
俺たちは現在、ミーティングルームに移動中
イチゴに頼み通話を繋いでもらい、あちらの様子はこっちで聞けている
『一時間前に距離およそ３０００の位置に、叫竜の反応を確認した。数はおよそ、１００～１５０』
『ひゃ、１５０…？』
第１３部隊の面々が、驚きたじろいているのがわかる
『今後更に増えると思われる。会敵予想時間はおよそ、３３時間後と出た。どれだけ急いでも、叫竜の到達前にキッシングを終わらせるのは不可能だ。そこで、この位置に防衛ラインを設ける。２６部隊を前衛として展開。１３部隊はバックアップとして後方に控えてもらう。』
『え？バックアップ？』
『かなりの乱戦になるだろうからね、連携の取りやすい仲間とやりたいんだ。』
『なッ!!』
『つまりミク達足手まといってことじゃん』
『んん…最優先事項は両プランテーションをつなぐメインパイプの防衛となる。そこでこの場所には単騎でも戦い抜けるＦＲＡＮＸ（フランクス）を

配置することにした』
『そんなＦＲＡＮＸＸがいるんですか…？』
『ここにはストレリチアを置く』
２６部隊の人たちはガタガタッっと立ち上がり、その動揺具合がわかる
「ゼロツーって前に２６部隊の人となんかあった？」
「ん～、覚えてないな～、どうでもいいし」
『ストレリチアだって…？これはどういう…？』
お、そろそろつきそうだ
プシュウっと空気が抜け、開かれるハッチ
「ごめんなさい、遅れたわ」
「ゼロツー、先どうぞ」
「ありがと、ダーリン♡」
「ＣＯＤＥ：００２…それに、ＣＯＤＥ：０１３まで…」
ＣＯＤＥ：０９０の声は怯えているかのように震えている
「賢人からの許可は？」
「ええ、出たわ。ゼロツーのパートナーとしてイクサにはストレリチアに乗ってもらいます」
「今はコレが最善の策だ」
「了解です」
「待ってください」
そこにＣＯＤＥ：０９０の待ったが入る
「我々は、ストレリチアとは一緒に戦えません」
「作戦の変更はない」
「しかし、そこにいる女は味方のことを顧みないッ!!そんなやつに背中を預けられませんッ!!ＣＯＤＥ：００２、お前には心当たりがあるはずだ。」
「なんのこと？」
「とぼけるなッ!!」
ゼロツーは恐らく本当に覚えていないだけだろうな
「２年前の共同戦線だ、あの時、お前のあまりに無茶な戦いのせいで、

僕らは戦場で孤立し僕は…パートナーを失ったんだぞッ!!」
　呼吸を荒くし、肩で息をするＣＯＤＥ：０９０
「ふーん、覚えてないな～、弱いやつは死ぬそれだけのことでしょ？」
「ッ!!」
　ゼロツーの言葉にカチンと来たのか、ゼロツーに歩み寄ろうとする
　しかし、俺はその間に割って入る
「今は、俺がゼロツーのパートナーだ。彼女のことは俺が抑える。」
「ＣＯＤＥ：０１３……」
「前は任せるよ、ＣＯＤＥ：０９０」

◇

「イクサ、帰ろ？暗くなっちゃう」
「あぁ、悪い、ちょっと２６プランテーションにようがあるんだ。先に帰っててくれないか？」
　イチゴが誘ってくるが、それを拒否する
　俺と乗った女性操縦者（ピスティル）が、今どうなっているのかを知りたい。
　ナナには予定を合わせてもらっているからな
　なるべく急がないと
「ふーん。」
「なんで、着いてくるんだよ…」
「いや～、一緒に行こうと思ってね。イクサじゃ迷子になりそうだから」
「そんなこと…あるか…」
　そう、俺はこう見えて方向音痴なのだ
　前に、ガーデンで迷子になったときに、こっぴどくナナとかオトナに囲まれて怒られたっけ…
　懐かしいな
「ところで、なにしに行くの？」
「あぁ、ここに来る２つ前のプランテーションがここ第２６プランテーションだったんだよ。だからそのときに一緒に乗ったやつの容

態を見に行ってみようと思って」
「もしかして、ついてこないほうが良かったかな？」
「いや、正直1人で合うのはちょっと怖かったから。助かったよ」
「えへへ、なら良かった」
ここか…
３回ノックし中に誰かいるかを確認する
「はーい、誰かな？入っていいよ」
扉の中で声がした
「よぉ、ひ、久しぶり…」
「ＣＯＤＥ：０１３…!?久しぶりだね…」
俺が来たことに驚いていたが、すぐにニッコリと笑っていた
「意識戻ったって聞いてな。元気そうで良かった」
「うん。ところで後ろにいるのは新しいパートナー？」
「あぁ、違うよ。こいつはＣＯＤＥ：０１５。俺たちはイチゴって読んでるんだけど、俺の部隊のリーダーなんだよ」
「へ～」
イチゴのことを見定めるかのように、そしてニッコリ笑うと
「ＣＯＤＥ：０３７っていいます。ＣＯＤＥ：０１３、イクサ君とは元パートナーだったの。よろしくねイチゴちゃん？」
「はい、よろしくおねがいしますね。元パートナーさん？」
バチバチと、二人の視線の間に稲妻が走っているように見えるのは俺だけだろうか…？
「ところでイクサ君。今の部隊はどう？楽しい？」
「うん、コイツのおかげでね」
「ふーん、そっか」
「お前は最近どうなの？」
「ちょっと右眼が痛いけど、特に問題ないって。２ヶ月後には実戦復帰できるってさ」
「そっか、良かった。今日はありがとう。また時間があったら遊びに来るよ」
「イクサ君…次の戦い、私はなにもできないけど、応援してるから」

ニッコリと笑う彼女。
さっき聞いた話だと2年前の共同戦線だから、コイツもいたんだよな
じゃあ俺のパートナーの話はしないほうがいいか…
「ありがとう、またな」
扉を締め、２６プランテーションをあとにしようと歩き出す
俺は一年前、２６部隊に移籍になったときに、彼女と同調(コネクト)した
その際に彼女は意識不明の重体
いわゆる植物人間と呼ばれる状態になっていた
最近、ナナの話だと廃人になった人たちが自我を取り戻しつつあるそうだ
いつか全員に謝れるといいんだけどな
「また思い詰めてる…」
「え…？顔に出てたか？」
「眉間がすごいことになってた」
マジか…
気をつけなきゃな…
「いつでも頼っていいからね」
ズキッ…
イチゴの笑顔が心に刺さる
でも…決めたことなんだ
「気が向いたらね」
「またそうやってはぐらかす～」
「ははは、ごめんってば」
「ほら、急ご。晩御飯が待ってるよ」
「今のイチゴ、フトシみたいだったぞ」
「う、うるさい!!」
俺はイチゴに手をひかれながら、みんなの待つセラススへの帰路についた

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ：ゴロー

イクサは遅めに帰ってきた

特に何かあったわけでもなくそのまま眠りについている

だけど、耐え難い痛みに襲われているのかまた唸っている

俺はそれから目を背けるように、部屋をあとにした

中庭に出てみると、何やらイチゴとゼロツーがドコかに行くのが見えた

ドコに行くつもりなのか…

Ｓｉｄｅ：ゴロー　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ：イチゴ

「２６部隊とのことについてなにか言うつもりはないよ。ただ、次の作戦では独断専行はしないで欲しい。ちゃんとリーダーの私の指示に従って動いて」

「またボクに指示するの？キミほんと偉そう」

ゼロツーは私の事を通り過ぎようとする

「ちょ、ちょっと!!話はまだ終わってない…!!」

立ち去ろうとするゼロツーの腕を掴むが力が強く引っ張られてしまう

「なに…？」

冷たく言い放つゼロツー

でも…これだけは言わないと…

「イクサに、無理させないで」

しかしゼロツーは私の手を振り払うと

「ボクと乗りたいって言ってきたのはダーリンなんだけど」

「わかってる。だからせめて、イクサの負担になるようなことはさせないで…」

「譲って欲しいの？でもキミ、ダーリンと２回も試したのに結局何も

できなかったじゃん」
「私のことはいいでしょ!!」
　思わず声を荒らげてしまう
「だったら、そっちも口出さないで…」
「貴女…イクサを利用するつもり？」
「ダーリンはボクのモノだ」
「死んじゃうかもしれないんだよ？」
「そうだよ」
「死んだらそれまでさ…」
　ダメだ、この女はイクサのことを利用している
　そう考えると怒りがこみ上げてきた
　我慢できなくなり、思いっきりゼロツーの頬を打つ
　その衝撃で、ゼロツーのカチューシャは外れて飛んでいく
　でもそんなの知ったものか…
「人でなし…アンタはやっぱ、人間じゃないッ!!」
　この言葉を聞いてか、ゼロツーの瞳は紅く染まり、怒っていることがわかった
「えっ…？」
「人間…？人間だって？じゃあさ、聞くけど君たちの人間ってなにさ…？」
「え？」
「ダーリンは？ボクもたくさんの男性操縦者（ステイメン）を殺してきたけどさ、多分ダーリンはその比にならないくらいの女性操縦者（ピスティル）を殺してるんじゃないかな？」
　そ、そんなはずはない
　だって、ＣＯＤＥ：０３７は生きてた
　今も元気になっている
　イクサが人を殺すだなんて…
「ダーリンはね？身体だけじゃなくて心まで壊していくって話だよね。だったら、ボクより…」
　やめて…

言わないで…
「よっぽど、バケモノなんじゃないかな…？」
その言葉が終わると同時に、地面が湿りだす
「雨だ…一緒に見たかったな、ダーリン…」
それだけ言い残すとゼロツーはこの場を去っていった
イクサを救うことができないただ弱い私を残して…

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：ゴロー

しばらく経って、イチゴは帰ってきた
雨に濡れてしまっていたイチゴにタオルを手渡す
「ほら、風邪引くぞ？」
「ありがとう…ちょっと用事で…」
「あぁ…」
「見てた？もしかして…」
「あぁ…」
言葉が詰まる
ゼロツーと何があったのか
それは聞くまでもないだろう
「わからないんだ、リーダーなのに…幼馴染なのに…私じゃ、イクサを乗せてあげられなかった…私じゃ、イクサを止めれなかった。でも今はアイツがいて…イクサだってそれを…　でも、私…私ッ…なんか変だ…ッ!!」
泣き出してしまうイチゴ
イクサは今のほうが本人からしてみれば幸せなのかもしれない
でも、周りからしてみれば心配でしょうがない
壊れていくイクサを見ていることしかできない
それも俺だって辛かった
「イチゴッ!!」

「私…私、嫌ッ!!嫌…頭がグチャグチャになる…なんなのコレ…イクサ…イクサァ…」
「イチゴ…」
泣きじゃくるイチゴの方をつかもうとした時、俺の手も震えていた
触ってしまったら、彼女が壊れてしまいそうで
「なんだよ…コレ…」

やっぱイクサ…お前は大バカ野郎だ…

Ｓｉｄｅ：ゴロー　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「雨の後って、いい匂いするんだね。また降らせてよ…あっ、そっか…キミじゃ無理なんだっけ？」
「わからないな…まだ。できるかもしれないし、できないかもしれない」
「ふふ…」
湖を見渡す
そういえばここって…
忘れもしない、あの日だ
「ボクたちが初めて会ったのはここだった」
「ゼロツーに出会って、俺はここにいることができてる。ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）に乗れている」
「そう、ボクだけがキミのパートナー…」
俺の制服のチャックを開くゼロツー
そこには、前よりも大きくなった繭のようなナニカ
「ダーリンはもう知ってるんだよね？ボクと３回以上乗れたパートナーは１人もいなかったこと」
「うん…」
「痛いでしょ？苦しいでしょ？でも、とってもキレイ…」

俺の胸を愛おしそうに撫でるゼロツー
「どうする？降りるなら今のうちだよ？」
「そんなの、聞かなくてもわかってるくせに」
「じゃあ、ちゃんと言って」
「俺は乗る。キミと一緒に戦う」
そうこたえると、ゼロツーは高笑いをする
この広い森に響く彼女の高い笑い声
それはなによりも心地良い
望んで手に入れたこの翼
記憶の中でなんども、俺に叫んでいる
冷たい鋼鉄を抱きしめていても
いつか折れるその翼がまだ折れていないのなら
まだ飛べるはず…
だから俺は翼が折れるまで
彼女と一緒に戦い続けよう…
それが俺の生きる理由だから…

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１５

Ｓｉｄｅ：イクサ

ハチから連絡があった
叫竜が群れをなして来てるって
決戦は近い
「本当に出るのか…？」
「もちろん。頼りにしてるよ、ゴロー」
「あぁ。」
俺は１人部屋を出る
「大バカ野郎……」
「…わかってるさ、そのくらい……」
でも俺はこうでないと生きていけない
それが、俺だから…

◇

「戦力差を考えれば、楽観的でいられないでしょう？」
「おいおい、ビビってんじゃねぇーよ。こっちにはこの俺様がいるんだからよぉ」
「ゾロメはともかく、今回ストレリチアもいるしね」
「ヒロも上手だから頑張ってね」
「ハハハ、期待に答えられるといいんだけどな」
「とにかく、２６部隊には負けねぇ」
「張り合う相手が違いますよ」
みんないつもどおりで良かった
まぁ、ゴローはちょっと不機嫌そうだけどね
「ふぅ…今は痛みはあんま無い……」
よし、いける…
デッキに向かおうと思いドアのところへと行くと

ドアが開かれたところにイチゴが立っていた
「イチゴ？どうかした？」
「あ、えっと、今日の作戦深夜から開始だって。」
「うん、聞いた。仮眠取ってきて正解だったな」
「私は、実はあんまり眠れなくて…」
そりゃあ危ないな
「作戦までもうちょい時間あるから、少しでも寝たほうがいいんじゃない？」
「え…？いや、大丈夫だよ」
あと3時間位か……
「イチゴはそこ座ってて」
と俺はベンチの方を指差す
ロッカールームへと戻り、ブランケット……は無いから俺の上着を持ってくる
「おまたせ」
「なんで上着持ってるの？」
「ん～？それはね…」
俺はイチゴの横に座るとイチゴに上着を掛けそのまま俺の方にイチゴの頭を乗っけさせた
「い、イクサ…？」
「まだ時間あるからちょっとだけでいいから寝てな？俺が起こすから大丈夫だよ」
「じゃ、じゃあそうする…」
イチゴの頭を撫でてやると、5分もしないうちに寝息を立て始めた
「ダーリン？なにしてるの？」
俺はゼロツーの方へ向き人差し指を口元に当て、「シー」っと静かにするように促す
「イチゴ、疲れてるだろうから寝させてあげたくてさ。ゼロツーは先行ってていいよ」
「ふーん…」
ゼロツーはそのまま、立ち去っていくかと思ったら

突然、「ねぇダーリン。ボクも眠くなってきたな～」と言い出した
「じゃあ、寝る？」
「うん!!」
今度は左肩にゼロツーの頭を乗っける
「今回の作戦、がんばろーね」
「そうだね、ダーリン」
そのあとゼロツーもあっという間に寝てしまった
今回の作戦…
悔いが残らないように…

◇

二人が寝てるのを見ていたら少し眠ってしまった
時計をみると、あと一時間ほどある
しかし、そろそろ行かないとマズいかな…
「よし、ゼロツー、イチゴ。起きて…」
「うん…」
イチゴは無事に起きたけど…ゼロツーは…
アレ、いなくなってる
端末を見てみると『先に行ってるね』とのこと
退屈になっちゃったのかな
「イチゴ、リーダー大変だろうけど、この作戦、絶対成功させような。頼りにしてるよ、リーダー」
「うん、私もイクサにこと頼りにしてるよ。だって私は昔からイクサのこと…」
「ん？」
「私はイクサのこと、姉弟みたいに思ってるから」
「うん、俺もイチゴのこと、兄妹みたいに思ってるよ。きっと、ヒロもゴローも。っと、長話しすぎたな。よし、走るぞイチゴ」
「あ、うん。ま、待ってよ…」
イチゴの手を引き走り出す

決戦まで、あと僅かだ…

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ：イチゴ

イクサと話せた

姉弟…か…

イクサは手のかかる弟みたいだもんね

少しの時間だったけどイクサを独占できた

「ヒロ…今回の作戦はストレリチアはなるだけ温存しよう」

「そうだね、俺もそう思ってたところだよ」

大丈夫、イクサならきっと３回目も生きて帰れる

「行こう、私達…みんなでッ!!」

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ

◇

Ｓｉｄｅ：イクサ

「ゼロツー、おまたせ。」

「いよいよだね、ダーリン」

「あぁ…」

俺は、今回の作戦だと初手は壁の上で待機

みんなのことを見守るだけ…

前に出てる第２６部隊

そして、第２６部隊が取り逃がした叫竜を狩る俺を除いた第１３部隊

そのさらに後ろにストレリチアという配置である

『叫竜に関して、新たな情報が入った。コンラッド級の群れの他、巨大な質量体の存在を確認した。過去のいかなるデータにも合致しなかったが、自律的に移動していることから、叫竜であると断定し、コ

レを［目標―β］と呼称する。』
眼前の群れの奥にいる立方体に、２本の雄牛の角のようなものが生えたやつのことを言っているんだろう
確かにあれはでかいな…
本当に叫竜だったらグーテンベルク級くらいの大きさなんじゃないか？
『でっけぇ～』
『なんだよ、ありゃあ…』
『小さいのもすごい数…』
『データがない以上。迂闊に手を出すのは危険だ…よって交戦開始後はコンラッド級の掃討を優先せよ。現場での判断は、ＣＯＤＥ：０９０に任せる』
『了解…』
『時間だ…各機、作戦開始…ストレリチアはその場で待機』

『『『『『『『『了解ッ!!』』』』』』』』

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：Ｏｔｈｅｒｓ

『よし、第２６部隊…行くぞッ!!』
『『『『応ッ!!』』』』
戦闘が始まった
第２６部隊のＦＲＡＮＸＸ（フランクス）は機体が統一されており、組織的な行動が得意なのが特徴的である
一機が、コンラッド級に向かい、ポーンハスタのアンカーを飛ばす
それが深々と突き刺さり、そのまま引き寄せられていく
そして宙に浮いたところを上から串刺しにする
コアが破壊され、爆散し蒼い爆煙が舞う
ほかにも、３機で一体を取り囲み、円を描くように機動する

一匹一匹を着実に潰していくつもりなのだろう
『各個撃破を心がけるんだ。落ち着いて対処すれば、負けはしないッ!!』
ＣＯＤＥ：０９０はそう言うと、また一匹ずつ仕留めていく
『何体抜かれた…？』
『３体……いや、４体ッ!!』
『１３部隊で対処を頼む。ただし、まだ前に出すぎないように。下手に動かれるとこちらの連携まで乱れてしまう』
よほど、１３部隊が邪魔なようだ
近づかないように言う
『邪魔なら邪魔ってはっきり言えよ。クソッ!!』
『ここまでお荷物扱いされるなんてな』
『事実でしょう？僕達はまだ未熟だ。２６部隊におんぶにだっこですよ』
『んだと!?』
『来るよ、集中してッ!!』
ジェニスタは銃剣で砲撃を行うもののそれが当たらなかった
『ここで、食い止めないとッ!!』
『ちょこまかとォ!!』
しかし、ジェニスタの巨大なルークスパロウでは、すばしっこいコンラッド級にはついていけないようで…
噛みつかれそのままやられそうになる
『ハァッ!!』
クロロフィッツの腕部が変形し、銃口が現れ、叫竜を掃討しようする
しかし、それは当たることはなく、捉えようとしたアルジェンティアとクロロフィッツは衝突する
『なにやってるんですッ!!』
『勢いが付き過ぎたんだよッ!!』
２体に挟まれて動けなくなってしまうジェニスタ
３体目が襲いかかろうとしたときデルフィニウムがコアを貫く

そしてそのまま、２体目にも止めを刺していく
『しっかり』
『イチゴちゃん、ありがとう』
『ゾロメ、深追いせずに敵をおびき寄せて。スピードあるんだから。』
『言われなくてもッ!!』
『ゴロー!!出来ればでいいから矢で足止めしてッ!!』
『わかったッ!!』
イフェイオンは弓であるエーデルモルガーンを使い矢を超音速で飛ばし叫竜の硬い皮膚へと突き刺さる
『ミツルはなるべくジェニスタから離れないようにサポート』
『イチゴも焦りすぎないようにね』
『わかってるよ、ヒロ』
『ＣＯＤＥ：０１５か…　ＣＯＤＥ：０１６といい、アレ程の動きができる１０番代がなぜあんなテストチームに…』
『第二波、接近…』
『来るぞッ、絶対に通すなッ!!』

Ｓｉｄｅ：Ｏｔｈｅｒｓ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「はぁ…はぁ…」
また痛みがぶり返してきた…
ズキズキと伝わる痛みは俺の精神を少しずつ、でも着実に削っていた
「ダーリン見てよ…、あんな無茶苦茶な戦い方してる。お行儀のいいあっちの連中とは大違い」
「押されてる？」
「ギリギリ踏ん張ってるってるよ。あ～ウズウズしてきた。ボクも早く戦いたいなぁ～」

グーッっと伸びをするゼロツー
そういえば、なんでゼロツーって叫竜と戦ってるんだろう
「ゼロツーってなんで叫竜と戦ってるの？いつも楽しそうだしなんか理由でもあるのかなって」
「理由か…ボクがバケモノだからかな…？　ダーリンはどうなの？」
「俺…？俺はね……なんでだろうな、キミと戦いたいから？」
「ふーん…、変なの…」
（ボクと戦いたいだなんて…）
見える限り…ホントだ、結構ギリギリ…
「じゃあ、俺たちも行こっか。押されてる盤面を覆せるのは俺達くらいでしょ？」
「あぁ、行こうか。ダーリンッ!!」

◇

『ストレリチアが出てきたッ!!』
投擲で一気に２０体ほどを押さえつけ、コアを的確に砕いて行く
他にも、コアを突き刺しながら、そのまま振り回し他の個体へとぶつける
よし、いける
「俺が前に出る。ジェニスタ。砲撃で叫竜を撹乱してくれ、逃げ惑うところを潰す。ココロ、フトシ…出来るな？」
『任せてイクサ君ッ!!』
『アイツまた…作戦を無視するなッ!!何故前に出てきたッ!?』
「ここで、数を減らさなきゃ、デカいのをやるときに辛くなる。第二波をしのいだら第２６部隊は補給を受けてくれ」
『どうする？』
『放っておけ、補給なんて受けるまでもない。それより、一気に方を付けるぞ』
複数の叫竜をワイヤーでぐるぐる巻きにし、そこにエネルギーを流し込む

そうすると、叫竜たちは爆散していった
『すげぇ…』
『ケッ』
『大した連携だな…』
『俺達もアレくらい出来るようにならないとね』

ゾロメたちは感心しているようだが、アレは結構マグマ燃料を使う
カートリッジ一個分をエネルギーを使うんだ
燃料切れもそう遠くないはずだが…
そんなことよりも、数が多い…
くっそ…
身体が痛み、集中力を削いでいき、同調(コネクト)にも、問題が出始める
「ハァ…ハァ…。まだだ…」
「ダーリン。その程度？」
「まさか…冗談キツイよ。ゼロツー」
「そうそう、その調子ッ!!」
まだまだいける…
戦いきらないとッ!!
しかし、背後を取られてしまい反応しきれない
そこに現れたのは桃色の影
『イクサッ!!アンタ、そろそろ一旦下がりなさいッ!!』
「まだだ、まだ戦えるッ!!」
『いいから、一旦持ち場に戻ってッ!!』
離れたイチゴからも連絡が入った
コンラッド級の掃討は終わった…
それなら…
「ゼロツー、一旦下がろっか…」
「ダーリンが言うなら、しょうがないなぁ…」
［目標―β］はどう出てくるんだろうか…

◇

『［目標―β］が第２防衛ラインを突破…』
『止まるつもりはない、というわけか…』
『このまま、［目標―β］に攻撃を仕掛けます。』
『慎重にな…』
しかし［目標―β］には手足のようなものが見当たらないが、どのように攻撃するのだろうか…
２６部隊は、ポーンハスタのアンカーを飛ばし、ワイヤーで動きを止める
『よし、効いてるぞ…今だッ!!』
再び、マグマエネルギーを流し込み攻撃する
ただそれを黙っているほど、叫竜は優しくなかった
キィィィィィンっと、暗い夜空に響く叫び声
まさに叫竜の言葉がふさわしく
その叫びは、悲鳴のようにも聴こえた
叫び終わると、［目標―β］はワイヤーを引きちぎり、体の形を変形させる
その姿はヒト型であり、ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）を大きく超える巨大な体躯をしている
『おいおい嘘だろ…』
『こんなのありかよ…ッ!!』
『グーテンベルク級…!!』
『マズいぞ…』
『進ませるものかッ!!各機、もう一度仕掛けるぞッ!!』
２６部隊が再び取り付こうと攻撃を始めようとする
しかし、アンカーは刺さりはするものの、あまりに硬い皮膚を貫くことはできずに、そのまま振り払われてしまう
『マズい…全機後退ッ…』
しかし、コントローラーをいくら動かしても反応しない
『燃料切れ…』

しかし、ＣＯＤＥ：０９０は無事だった
『ぼーっとしてんじゃねぇッ!!今の貸しだからなッ!!』
「よくやったぞゾロメ…」
『すまない…』
『２６部隊、各機は後退…グーテンベルク級には、１３部隊で対処する』

『対処するって言われても…』
『あんな大きいのどうやって止めれば…』
『でもやらないといけないんでしょ…』
『止めるだけでは意味がありません…倒せなければ壁が突破されて終わりです』
『ストレリチアと連携すればなんとかなるってッ!!』
『うん、それしかないかな…』
『やり方なんてどうだっていい…俺達１３部隊だけでやれるってところ見せてやろうぜッ!!』
みんなはグーテンベルク級と並走しながら近づいてくる
「わかった、任せて…」
『待って、ストレリチアはそこから動かないで…ッ!!』
『ハァ!?』
『俺達だけじゃ無理だって』
『イチゴ、なにか作戦があるの…?』
『ストレリチアには止めだけ任せる』
なるほど、たしかにそっちのほうがやりやすいが…
『温存してる場合かよッ!!』
『落ち着いてゾロメ、あのデカいやつのコアに届くのはストレリチアの槍だけだと思う』
『ヒロ……』
『だから、俺達で隙きを作って、ストレリチアに繋ごう。そういうことでしょ?イチゴ…』
『う、うん…』

『俺達の意地、魅せてやろう…ッ!!』
『そ、そういうことなら…』
『イクサ、聴こえてたな？最後は任せる…ッ!!』
「あぁ、一撃で仕留めてやるッ!!行こう…ゼロツーッ!!」
「ああ、行こう、ダーリンッ!!」

Episode．16

Side：イクサ

『13部隊、作戦開始ッ!!』
『『『『『『「了解ッ!!」』』』』』』
もうすぐ叫竜がこっちに来る
「聞こえたね?ゼロツー、みんなが止めてる間に決めるよ」
「あぁ、わかってるさッ!!」
各機が叫竜に飛び付き動きを止めようと試みている
『いよっしゃぁッ!!行っくぜぇッ!!』
『耐えてッ!!男でしょ!?』
『そっちこそ気張れ!!』
『当然ッ…二度と足手まといなんて言わせないんだからッ!!』

『ゴロー、いくよッ!!』
『おうッ、彼奴等ばっかにいいカッコさせるかよッ!!』

『ふんがぁぁあぁあぁぁッ!!』
『フトシくん!!』
『なんとしてもストレリチアにつなげるよッ!!』
『わかっていますよォ!!』
アルジェンティア、イフェイオンに続き、ジェニスタ、クロロフィッツも叫竜に取り憑く

「ハァ…ハァ…ハァ…ッ!!」
激痛は更に強くなり、俺の意識は朦朧としはじめ、繭の侵食は首元まで広がっていた
「ダーリン痛い?でも、アイツを倒さないと終われないよ?出来るよね?」
「あぁ、もちろん…ッ!!」

「それでこそ、ボクのダーリンッ!!」
一気に飛び上がる
それと同時に、みんなが叫竜の、人間で言う膝に当たる部分にエネルギーを撃ち込む
少し遅れて、足が爆散し、叫竜は上を向くように倒れていく
位置も完璧
『イクサッ!!』
『今だッ!!』
いまなら、全力の一撃を叩き込めるッ!!
「コレで、ケリを付けるッ!!」
混濁した意識のなか、ヤツのコア目掛けて一直線に降下する
黒い皮膚にに突き刺さる
しかし、
「浅いか…でもっ!!」
スラスターを再燃させ、勢いを増す
そうすると、徐々に硬い皮膚はひび割れ、クイーンパイクの刃が抉っていく
まだだ、あと少しだけでいいッ!!
スラスターの勢いをより一層強くし押し込み続ける
「「届けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ!!」」
今だッ!!
刃が完全に突き刺さったところで、トリガーを引く
そうすると、コードを通ってストレリチア本体から、槍『クイーンパイク』へとマグマエネルギーが一気に送り込まれる
先端の刃にエネルギーが集中し、叫竜を内側から爆破
目の前は、閃光に包まれなにも見えなくなる
「ハァ…ッ　ハァ…ッ　ハァ…ッ　ハァ…ッ　……やった」
これで、最期…か……
俺は、血涙を流し紅く染まった視界の中
なぜか吹き飛ばされているのを視認しながら
意識を手放した…

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：ミク

イクサが、仕留めたと思っていたのに…
叫竜はまだ殺れてなかった…
ストレリチアは殴り飛ばされ、メインパイプ前の壁までふっ飛ばされていく
前で踏みとどまっているようだけど…
叫竜は立ち上がると、大きく形を変え金槌のような形へと変化した
『イクサッ!!逃げてッ!!』
ミクの叫びは無情にも彼には届かずに
スラスターのようなものを吹かしたハンマーは火花を散らしストレリチアにその一撃を加えた
壁に打ち付けられるストレリチア
『ＣＯＤＥ：００２とＣＯＤＥ：０１３とのリンク切断』
『そんなッ…!!』
『このタイミングで時間切れだというのか…!?』
ハチさんやナナさんの声が聴こえてくる
え…？
それってつまり……
思考するより先に、叫竜は移動しストレリチアに近づく
『イクサッ!!ゼロツーッ!!応答してくれッ!!』
「おい、イクサッ!!いつもみたいに、ちょっと抜けたこといってみろよ」
ヒロとゾロメの言葉に反応がない
『あ…あッ…』
イチゴもショックだったのかデルフィニウムのリンクが切れる
『少しは心配してくれてたのか…』

『不謹慎なことで賭け事してんじゃねぇよ』
『ミク、大丈夫だった？』
『ありがとう』
『もがもが…』
『お前が無事で良かった…』

思い出すのは他愛もない日常と、その中で彼が自分に向けてくれた優しさ
ミクのなかで、イクサがこんなに大きい存在になってだなんて…
「イクサ…嫌よ…こんなところで死んじゃうなんて…」
アルジェンティアもリンクが切れてしまい、コックピットは警告色のオレンジ色に変わる
「おい、ミクッ!!しっかりしろッ!!」
「イクサが死んだって決まったわけじゃねぇだろッ!!」
「だ、だってッ…!!」
壊れた蛇口のように、絶え間無くミクの瞳からは涙が溢れ出ている
こんなに大切なのに、なにか言ってあげたかったのに、あの少し寂しそうな背中に、優しい笑顔に
なにも言ってあげられなかった…!!
なにも力になれなかった…!!
『う、嘘でしょ…？』
『あの噂は本当だったの？』
『早く助けなきゃッ!!』
『それどころか、このままじゃ壁も突破されてしまいますよ!!』
『と、止めないと…!!』
通信が繋がったままなのを気が付いていないのか、イチゴたちの声も聞こえる
『言えなかった…乗らないでって言えなかった……!!』
『イチゴ、しっかりしてッ!!泣いてる場合じゃない!!今は俺達の命について考えないとッ!!』
そっか…イチゴもなにも言えなかったんだ

でも、こんなの…
あんまりすぎるよ…

Ｓｉｄｅ：ミク　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

暗い……
そっか、俺死んだのか…
でも、最期まで戦い抜いた
もう終わったんだ…
「誰だ…？」

『ＣＯＤＥ：０１３…』

「それは俺だッ!!……ッ!!」
息を呑む
振り返ると、この間夢に出てきた女がいたから
『だから言っただろ？あの女はお前を壊すだけだと』
「そう…なのかもな…」
『まぁ、これでお前も懲りただろ。次は失敗しないことだな』
「次…？次なんて…」
『もし、お前は生きて戻れるとしたらどうする…？』
「それは…」
わからない
もうあのデカいのも倒したんだ
ゼロツーとも、みんなとも戦えた
もう終わっていいんじゃないか？

ここって…
大きい白い木

どっかで見たような…

あっ…ゼロツー
見送りに来てくれたのかな
「ありがとう、キミのおかげで前に進めた。みんなといられた。短かったけど…それでも戦い抜けた。」
君はこっちを見る
なんで君は、そんな悲しい顔をするんだ…？

『キョウダイみたいに思ってるからさ』
『頼りにしてるよ？イクサ』
『アンタもそんなこというのね』
『俺はお前が俺たちより先に乗ったなんて認めてねぇからな‼』
『任せてイクサ君ッ!!』
『イクサ、それ食べないなら食べてもいい？』
『またサボったの？いい加減にしたほうがいいんじゃない？』
『ははは、アイツ昔からお前のことになるとすぐムキになってたからな』
『よく、そんな恥ずかしいこと言えるね』
『貴方には関係ありませんよ…』

『ダーリン…』
『今から僕が、キミの■■■■■ッ!!』

「あぁ…ダメだ…」
思い出すのは13部隊の事ばっかり
なにが死ぬ覚悟はできてるだよ…
まだみんなといたいじゃんか…
『どうするんだ…？』
「どうしようね」
俺は…でも許されてはいけないだろ…

紅い景色の中、君は悶え戦っていた
まさか、倒せていなかったのか…
血を吐きながら前に進み続ける
ダメだ…このままじゃ、君も死んじゃう
「コイツッ!!バケモノの分際でぇッ!!」
やめろ…1人じゃ勝てない…
なんで、そんなになってまで戦うんだよ…
『それは、僕がバケモノだからかな…?』
パートナーが死ぬたびに、1人でこうやって戦って
1人じゃ飛べなかったのは君も同じだったのか…?
『ボクはいつもヒトリだよ』
『このツノのせいでね』
トンッっと背中を押される感覚がある
『私にはなにもできないけど…応援してるから』
CODE：037…
それだけではない、俺がこれまで同調（コネクト）してきた女性操縦者（ピスティル）たちの姿があった
『ほら、前を向いて…今のパートナーを守ってあげてね』
『俺でもできたから…イクサにだって出来るはずだよ…』
ヒロ……?
『決まったか?』
「あぁ…お前には懲りてないじゃんかって言われちゃうかもしれないけどさ」

『はぁ…全く、そんな気はしてたさ…。本当にいいのか？』
「あぁ、道は開けた…あとは進むだけだッ…」

荒れた吹雪の中…
紅い背中を追い続ける
その風を超えて、向こうへ…!!

◇

まだ戦える
君がヒトリで苦しんでるのに、寝てる場合じゃないだろ
君を助けたい
君ともう一度、戦いたい
翼は折れていない
それなら…まだッ…!!
俺の翼は、君のためにあるんだからッ!!

瞬間、体中の痛みが引く
「クッ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
叫ぶゼロツー
俺はそれを包み込むように抱きしめる
「ダー…リン……」
「ただいま…もう、君をヒトリにしないよ…」
「うん、おかえり…」

再び繋がる二人
その獅子は、獣から戦乙女へと姿を変える
叫竜はもう一撃と、その体を振り下ろした瞬間
拗られ、為す術もないく宙で一回転させられてしまう
『イクサ、アイツ生きてやがったッ!!』

「まるで、生きてて残念みたいな言い方だな」
『違ッ…信じられなくて…』
「わかってるよ…」
『イクサ…』
　しかし、安息もつかの間、叫竜は再び姿を変えようとする
『また変形しちゃう!!』
『マズいですよッ!!』
『なにボサってしてるのッ、イチゴ、ミクッ!!』
『チャンスよッ!!』
『今度はこっちの番だッ!!』
『ここでなんとかするッ!!』
『俺達もやるぞッ!!』

『もう一度、ストレリチアに繋げようッ…!!』
『うんッ!!』
　叫竜の各部に挟まり、再生を遅れさせているみんな
『イクサッ!!』
『ゼロツーッ!!』
　コアは見えてる
　あとは、突き進むだけだッ!!
「飛ぶよッ!!」
「あぁッ!!」
「ボク達の翼でッ!!」
「俺達の翼でッ!!」
　すべてのスラスターを一斉展開し、一気に飛び上がる
　グングンと、その速度は上がっていく
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!!!!!」
　コアを砕き、その勢いのまま、叫竜のその巨体は持ち上がっていく
　光の翼を広げながら…

「ねぇ。ゼロツー。」

「ん？」
「俺がフランクスに乗る理由、ちょっと変わったかも…」
「ふーん？どんな？」
「君と戦いたいじゃなくて、君の翼でありたい…かな。この先どうなるかわからないけど。死ぬまで君の翼でいたいな」
「ダーリンなら、きっとこの先も大丈夫だよ…」

――ボクはもっと、叫竜を倒さないといけないんだ…

「ダーリン・イン・ザ・フランキス：死の少年」～第一部・完～

「なんだ、仲良さそうにやってるじゃないか…9（ナイン・イオタ）ι」

第二部へと続く…

Ｅｐｉｓｏｄｅ．Ｅｘｔｒａ—１

オリジナルキャラ人物紹介

本名：ＣＯＤＥ：０１３
通称：イクサ
所属：第１３部隊
身長：１６９ｃｍ
体重：５８ｋｇ
血液型：Ｏ型
イメージカラー：白
容姿：長めの白髪を一つにまとめている
　右眼が金色で眼帯で隠されている
　左眼が赤色

眼帯有

眼帯無

設定
本作、『ダーリン・イン・ザ・フランキス：死の少年』の主人公。
『Ｅｐｉｓｏｄｅ．１』より初登場
監督者の記録より…
幼少期から、ＣＯＤＥ（イチゴ）：０１５（ゴ）や ＣＯＤＥ（ヒロ）：０１６、ＣＯＤＥ（ゴロー）：０５６と仲が良かったが、彼のある力が覚醒した際に、ガーデンから別の特別施設へと移動になり、関係が途絶える。
生まれつきオッドアイだった彼だが、それは七賢人たちや、オトナが『魔眼』と呼ぶ力だった。この力により、彼と同調（コネクト）した女性操縦者（ピスティル）は、死亡もしくは意識の戻らない植物人間や、廃人になってしまうとのこと。心身ともに、女性操縦者（ピスティル）を殺すことから、多くのパラサイトから『死神』と呼ばれ、忌み嫌われていた。そのため、各

プランテーションをたらい回しにされ、所属は点々としている。ある日、急造のテストチームである第１３部隊に配属された際にＣＯＤＥ：０１５やＣＯＤＥ：０１６、ＣＯＤＥ：０５６などの旧友との再会を果たす。

そんなある日のこと、セラスに訪れたＣＯＤＥ：００２と出会う。その直後の、１３プランテーションの起動の義の最中に叫竜の襲撃にあい、動けない第１３部隊の守るため、そして独りで戦おうとするＣＯＤＥ：００２を放っておけなかったため、ＣＯＤＥ：００２と共にＦＲＡＮＸＸ、ストレリチアに乗ることを決意する。彼女とＦＲＡＮＸＸに乗ることのできることが判明するほか、その後のＣＯＤＥ：０１５との起動実験では、本来ありえない男性操縦者単身でのＦＲＡＮＸＸを起動するなど特殊検体さを遺憾なく発揮している。その他、高威力のテーザーガンを食らっても数十分で目覚めたり、骨が折れても数日で完治するなど人間離れの肉体を持つ。その原因は［この先は閲覧できない］

◇

本名：ＣＯＤＥ：０３７
通称：―
所属：第２６部隊
身長：１７５ｃｍ
体重：６４ｋｇ
血液型：Ｏ型
イメージカラー：黄色
容姿：黒い髪
　黄色のメッシュ
　黒い瞳

設定

本作『ダーリン・イン・ザ・フランキス』のオリジナルキャラクター
『Ｅｐｉｓｏｄｅ．１４』より登場
第２６部隊のメンバーの１人であり、イクサの元パートナー
イクサと同調（コネクト）して生還した数少ない女性操縦者（ピスティル）の１人で、イクサが
罪悪感などを感じていないかなど、よく気にかけている。
ボーイッシュで、現代の高校とかにいたら、制服は迷わずネクタイ
選ぶタイプ
イクサをからかうことが好き

【現パロ　ＣＯＤＥ：０１３＆ＣＯＤＥ：０３７】

◇

オリジナルＦＲＡＮＸＸ（フランクス）紹介

イフエイオン
ＣＯＤＥ（ナ）：７０３（オミ）とＣＯＤＥ（ゴ）：０５６（ロー）が搭乗するＦＲＡＮＸＸ（フランクス）
メインカラーは黄色で、中距離からの援護を目的とした機体
弓状の武器、『エーデルモルガーン』を使用する。
特殊機構により、超音速で矢を射る事ができる
リムの部分が刃になっており、近接戦闘も可能。

第二部
Ｅｐｉｓｏｄｅ．１７

Ｓｉｄｅ：イクサ

そらを飛ぶ無数のカモメ達が俺達を歓迎する
第２６プランテーションとのキッシングを無事に成功を収めた俺達、第１３部隊には特別に休暇が与えられた
そして俺達は、フランクス博士の計らいにより、今なんと…

「「海だァ……!!」」

そう!!俺達は現在、今では数少ない泳げる海に遊びに来ているのだ!!
「ほんと、ガキ…、休みだからって浮かれすぎ…!!」
「しょうがないよ、泳いでいい海なんて、私達初めてだもん」
「でも、地上でまだ、こんな場所残ってたんだ」
地上は、叫竜がいるせいで、人間が生活するには厳しすぎる
だが、そのなかで、ここが残っているのは奇跡としか言いようは無いだろう
「それにしても、アンタは眼帯外しなさいよ。眼帯の形に日焼けするわよ」
「えー、めんどくさ～い」
それに関しては問題ない…!!
なぜなら、ゼロツーに背中とかも含め日焼け止め塗ってもらったからな
「……あのさ、イクサ…、今日の髪ｇ「ダーリンッ!!行こッ!!」」
俺はゼロツーに手を引っ張られて連れて行かれる
「ゼロツーッ!!そんなに引っ張らなくても海は逃げないって…」
「ダーリン、は・や・くッ!!」

ゼロツーもみんなも、少し気分がふわふわと浮ついてるな…
「あ、ちょっとイクサッ!!待ちなさいよ!!」
「悪い!!また後で～」
ミクがなにかいいたげだったがゼロツーに強制連行されているのだ
それにゼロツーが前から海に来たがっていたのも知ってる
だから俺はなるだけゼロツーを優先してあげたいしな
「イクサ君、元気になったね。」
「なんか心配して損しちゃった。」
「でも、ゼロツーの噂も晴れて、イクサも正式なパラサイトになれたんだ。いい事ずくめじゃないか」
少しずつ離れていくなかそんな話し声が聴こえた
本当にいい事ずくめだよな
「それぇ!!」
「ぶはッ!!」
余所見をしていたらゼロツーが水を顔面にかけてきた
しょ、しょっぱい…
海の水がしょっぱいのって本当だったんだな
「余所見厳禁だよ!!ダーリンッ!!」
「やったなぁ…それっ!!」
やり返すようにゼロツーにも水を掛けるがゼロツーの力が強いのか、俺が飛ばした水はゼロツーに届く前にゼロツーが掛けた水に相殺されてこっち側に来る
世界っていうものは残酷なんだな…
こんなに差があったら勝てるわけないじゃないかッ!!
と思いつつも、ゼロツーが楽しそうだから割りとこれでもいいのかもしれない
さーて、今日は遊ぶぞぉッ!!

◇

～数日前～
「お～、ゼロツー、無事だったな」
ストレリチアの格納庫を見ていた俺らに、機械混じりの声が聴こえてくる
「ダーリンが頑張ってくれたからね。わざわざ来なくても大丈夫だったのに」
「そう言うな」
「もう帰るの？」
「目的は果たしたからな、必要なかったようじゃ」
顔の右半分が鋼鉄に包まれている老人…
この人は…
「イクサ、こちらはフランクス博士、ＦＲＡＮＸＸ（フランクス）の生みの親よ」
そんなにすごい人だったのか…
「そしてこの子が…「紹介はいいよ」
ナナの言葉を遮る金髪の少年
「どうせ彼らとは、また会うことになるだろうからね…」
彼はそういうと、俺の方に歩みを寄せてきた
「潰されずに生き残った人間初めて見るよ。ふーん、こんな感じなんだね!!」
なんだこいつ…
距離感が掴めない…
「ボク、君たちに興味あるな」
くそ、コイツがゾロメだったら顔面を掴んでそのまま引き剥がすのに…
しかし、初対面でそれをやるのは気が引ける
「博士、本日を以ってストレリチア及びＣＯＤＥ：００２は、この第１３部隊の管轄対象にシフトします」
「とっくにジジイどもから聞いとるわい」
「よって、只今を以ってＣＯＤＥ：０１３を正式に、ＣＯＤＥ：００２のパートナーとして任命する!!」
ハチのこえが響き、俺はビクッってなる

そっか、俺のことか…
「はいッ!!」
「ダーリンッ!!嬉しいッ!!」
ゼロツーは力強く俺のことを抱きしめるのだが、身体が圧迫され苦しい…
「ねえ、博士!!ボク、ダーリンと二人でやっていくよ!!」

◇

「いくよ～!!」
「来いっ!!」
「よし、そーれッ!!」
時は元に戻って現在
俺はゼロツーと泳ぎながらみんなのことを眺めていた
ミクとココロがビーチバレーを初めたのだが…
それを遠目から見る輩が４名…
「はぁ…海って最高だね…」
「心做しか、５割増しで可愛くも見える不思議…」
「確かに、これもなかなかだな」
「ハハハ」
「あれ、ヒロとゴローも結構この手の話題にはいける口?」
ヒロとゴローの二人の参戦は予想外だったのか不思議そうに見るフトシ
「所詮、二桁組のいい子ちゃん集団かと思ってたけど、案外話通じるんだな…」
「なんだよ!!俺だって男だぞッ!?この素晴らしい状況をスルーできるはず…」
「うわぁぁぁぁぁッ!!」
謎に熱弁を初めたゴローの横で、ボールに夢中になっていた女子二人組が激突し、転んでいる
「いてて…大丈夫?」

「ごめん、上ばっか見てた…」
「あ、紐緩んでる…」
「えッ!!やだやだ結んで!!」
　大パニックしている女子の横で、ゴローたちは歓声を上げる
「「「海って、最高だなッ!!」」」
　俺はそんな奴らを横目にゼロツーについていく
「ねぇ、何処までいくつもり？」
「ハァ…海ってとっても気持ちいね～。今度は本物の海だね、ダーリン!!」
　うん…彼奴等が言ってることを今理解できた
　ゼロツーが笑って、キラキラしてる
　何故かすごい幸福感に包まれる
　ずっと眺めていたいくらいだ
　それにしても、ナオミとミツルはいないし
　イチゴとイクノも入ればいいのに
「ダーリン？」
「いや、水着姿がさ…」
「？……もしかして変？」
「そうじゃなくてさ、よく似合っててなんかちょっと小恥ずかしいかな…」
「前にボクの裸見たくせに～」
「アレは事故で、わざとじゃないよッ!!」
　いたずらっぽく笑うゼロツーもやっぱりキレイだな
「ダーリンがボクをここまで連れてきてくれたんだよ？ボク、泳げる海って初めてなんだ。ダーリンはボクの翼でしょ？ダーリンと一緒ならボクは何処にでもいける…ねぇダーリン、ボク達これからは、ずーっといっしょだよね？」
　ずっと…かぁ…
　そういえば、フランクス博士の言っていた
『ＣＯＤＥ：０１３、お前に１つだけ忠告しておく…己の感情までは喰われるな。今後もずっと、パートナーを続けていきたいならな。後に

お前自身が苦しむことになる』
　あの言葉の意味って、一体なんなんだろう
「ダーリンはボクと、一線を超えたんだよ？」
　顔と顔の距離が５ｃｍにも満たないほどの距離になる
　そのままキスされる…
　そう思ったのだが…ゼロツーは俺の頬を優しく舐めた
「ははは、やっぱりダーリンはドキドキする味だ…」
　俺が反抗しようと思い口を開こうとするが、ゼロツーの人差し指で簡単に抑えられてしまう
「キスされるかと思った？キスはね、ボクのものって言う証。だからダーリンは好きな人としかキスしちゃダメなんだよ？」
「好き？」
　人間に対して…好き…か……
　そんなの考えたこともなかったな
「それともダーリン…ボク以外の人としたことあるの？」
「いや、あの、それは…」
　なにか弁解しようとしたところで足元に違和感を覚える
　あれ？彼奴等は？
　先程までゴロー達がいた位置には誰もいなくなっており、俺は瞬時に足元にいるのはアイツラだと理解できた
　うん、理解はできたが行動に出せなかった…
　だってそれより先に足が引っ張られるんだもん
「うわぁッ!!」
「？……ダーリン？」
　引き込まれるなか足元には案の定フトシとゾロメ、ゴローやヒロもいる
　ああ、なんてこったい
「捕まえたぞォ!!」
　そのまま、四人がかりで担がれてそのまま、人気のない場所に連れて行かれる
　どしゃっと投げられて俺は顔面から着地する

「なんだよ、いきなり…普通に痛いんだが…？」
「いや、ごめんね、イクサ…邪魔するつもりはなかったんだけどゾロメ達が聞かなくて…」
　前のめりになり俺に顔を近づけるゾロメ
「んだよ…」
「キスってなんだ？」
「フェッ!?き、聞いてたのかよ!?」
「『キス』…初めて聞く言葉だけど…なんだか素敵な響き…」
　フトシに視線が集まっている間になんとかしてコイツラから逃げなければ…
　じゃないと俺が死ぬ!!精神的に!!
「どこいくのイクサくぅん？なんか隠し事してなぁい？」
　首を絞めてくるゾロメ
　てめぇ…投げ飛ばすぞ…
「二人でなにしてたのぉ？」
「なにもしてない!!な、なぁ？ゴロー」
「なぁ、イクサ…俺も教えて欲しい…、キスってなんだ？」
「おめーもかよ!!クソッタレがッ!!」
　あー、まさに四面楚歌だ…
　あとゴロー、お前は何故眼鏡を直した
「俺もよくは知らないけどさ…人の口と口が触れ合ってくっつくというか…なんていうか…」
「「「口ぃ!?」」」
　四人とも驚いたような顔をしている
　ヒロ、お前ちゃっかりそっち側なんだな…
「ごはん食べること以外に、口って何か意味あるの!?」
「お前、呼吸も会話もしてるだろ…」
「その、キスってのをするとどうなるんだ!?」
　どうなるか…
「暖かくて、柔らかくて、ドキドキしてなんだか心がポカポカした…かな…、で、でもさっきはしてないから!!」

「俺、ちょっと興味あるかも…」
「うわぁぁぁぁ!!なんだそれ超気になるッ!!また俺達より先を行きやがってッ!!」
俺に近づき、ガシッと俺の肩を掴むゾロメ
「おい待て、お前何をッ!!」
「俺にもさせろォッ!!」
「離せッ!!好きな人としかしちゃダメだって、ゼロツーが…」
「んだよ、好きな人ってッ!!」
あ、イチゴ…
「フンッ!!」
俺はゾロメを掴むと、そのまま海に投げ捨てた…
さらば、ゾロメ…
「なにしてるの…?」
「イチゴはキスって知ってる?」
「え?」
「人の口と口が触れるやつ…」
俺の顔を一回見るとイチゴはそっぽを向いて
「し、知らない!!」
とだけ答えた
イチゴの奥、その先にミクが手を振っているのが見えた
俺はミクの方へと駆け寄る
「みんなぁ〜、ちょっといい?」
「どうした?なんかあった?」
「うん、なんかね…ミツルが…」
「?」

Ｅｐｉｓｏｄｅ．１８

Ｓｉｄｅ：イクサ

「ねぇ…本当なの？」
「うん、この道を抜けたすぐ先にあったの」
「探検みたいでワクワクするなぁ」
俺達は今、大岩の割れ目の薄暗く狭い道を通っている
なにやら、ミツルとナオミが何かを見つけたらしく、皆で見に行くとのこと
「でも、暗くて少し気味が悪いね…」
「別に無理してついてこなくても良かったんですよ？」
「なんだよ!!ココロちゃんに向かってその言い方!!」
「少なくとも、この先の安全は保証できないので…」
木々が生い茂りながらも、自然にできたとは思えないほどの階段
これは明らかに人工物だ
もっとも、ひどく風化してしまってはいるけどな…
「うわぁッ!!」
俺の目の前でミクが木の根に足を引っ掛け、転びそうになったところを受け止める
「よっと…」
階段だからって、足元を疎かにすると危ないかもな…
木の根が所々で飛び出ているし、階段も一部は欠けていたりヒビが入っている
「大丈夫だったか？怪我はない？」
「う、うん。ありがと…」
そういえば、なにか忘れている気がする
あっ…
「そういえばさ、朝なにか言いかけてたけどあれ結局なんだったんだ？」
「あ～、ミク、今日髪型変えてみたんだけどさ…、ど、どうかな？」

いつもはツインテールにしているが、今日はお団子にしている
「新鮮でいいな、よく似合ってる。可愛いよ」
「そ、そう?えへへ…と、当然よね」
顔を赤くしながらも誇らしげにしている
「見えてきました…」
その声に視線を向けると、蔦などが絡まった見慣れない建造物や柱などがあった
これは…
「なに…ここ…」
鉄骨を組み合わせたようなものは拉げ、これが元々の形ではないことがわかる
大きな鏡や、人を象ったような模様の看板
石レンガの塀…窓ガラス…
「まるで、小さな都市みたいね…」
「都市ぃ?オトナたちが住んでるあの都市とはぜんぜん違うじゃん」
「誰か、人が住んでたりするのかな…」
「どうでしょうね、プランテーション以外に人が暮らしているなんて、聞いたことないですけど…」

◇

俺はみんなから離れ、少し探索してみることにした
大きな鉄の箱
中には小さなバックが散乱していたり、座席であろうそれは生地が破れ内側のスポンジが露出していた
まわりに…みんなはいないな…
右眼の周りが暑くて蒸れてきたので一度外しておこう
そう思って外したときだった
「なんだ、これ…」
廃墟だった、建物は真新しくなり、俺の周りを小さなコドモたちが走り回り、その先にあるベンチにはオトナがコドモを見守りながら談

笑している
先程まで倒れていた柱も直立し、柱と柱の間を黒色のワイヤーが繋いでいる
体中から汗が吹き出す
暑いからではない。体から出る汗は冷たく、俺の頭をより冴えさせる
「イクサ…？」
「はっ…？」
「どうしたのよ、いきなり突っ立ったまま動かなくなっちゃって…」
視線を向けるとそこにはミクが立っていた
「あれ、俺は今何を…」
幻覚でも見ていたというのだろうか
あたりを見回すと、今度は廃墟の街に元通りになっていた
「みんな、先行っちゃったわよ。急ぎましょ」
「あ、うん…」
俺はミクに手を引かれたまま走ってみんなを追いかけた

◇

ゾロメが見つけた大きな建物
その外見は俺達が住む寄宿舎とよく似ている
「おーい、誰かいますか…？」
どこも、ボロボロになっているし、木に貫かれたピアノ…これじゃあ弾けないだろうな…
「なぁんか思ってたのと違ったな」
「アンタは一体なにを期待してたの…？」
「だってさぁ!!俺達が暮らしてる寄宿舎と代り映えしないじゃん」
「確かに、まるでこれをモデルに、私達の環境が造られてるみたい…」
イクノがこう言うけど、俺もなんだかそんな感じがするかな…
「なんのために…？」
「さぁ…」

「そんなことよりも、そろそろ戻ろう。日が暮れる」
「そうだね」
「もうちょい探索しようぜ!!」
ナオミが賛同してくれたがゾロメがそれを崩していく
「あれ、ココロちゃんは？」
「ん？さっきまでいただろ？それならあんま離れてないだろ。俺探してくるよ」
「あ、じゃあミクもついてく。イチゴからイクサは方向音痴だって聞いてるし」
イチゴ、アイツなに話したんだ…
ん…？あれココロじゃないか…？
少し歩いたところでココロを見つける
なにかの建物の入口に突っ立ているが…
なかに入っていくな
「ついていってみましょ」
「そうだな」
ついていってみると茶色の瓶が所々にあったり、投薬などの字があったため、なんらかの医療施設だったことが伺える
ココロが何かを見つけたのか、足元の小さな手帳のようなものを拾う
「赤ちゃん……？」
しかし、突然、ミシミシと鳴り出す本棚
「ココロッ!!」
「い、イクサ君ッ!!」
俺が一気に駆け出し、本棚を手で受け止める
ふぅ…なんとかなった…
「今の状況…ココロさんの手を引いたほうが良かったんじゃないですか？」
「おぉ、ミツルいたのか…冷静に考えたらそっちのほうが安全だったな」
本棚を倒しつつ自分が冷静じゃなかったことを思い知る

「全く…ココロさん1人で行動しないでください。ここでの安全は保証できないので…」
「ご、ごめんなさい…」
　でも、誰も怪我なくてよかった
「そういえば、イクサ、アンタありえないくらい力持ちだったのね、片手で本棚受け止めるとか」
「え？」
　言われてから気が付いたなんでこんな事出来るんだ…
　そういえば遠く離れたみんなの話し声も聴こえるようになった
　俺の身体になにか異変が起こっているのか…？
　いや、やめておこう…
　これ以上は考えたくないな…

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イチゴ

　みんなと離れて、すこし建物がズラッと並ぶ通りへと入ってきた
　その一角には、シャッターが上がっているものもあり、中の様子もうかがえる
　その建物のガラスに張ってある一枚のポスターに目が行く
　そこには『キスの鼓動』と大きくかいてあり、男と女が抱き合うような写真も添えられていた
「キス…口と口…」
　思い出すのは、満身創痍になって、無意識に助けを求めていたイクサとのキス
　唇に当たった指が、キスの感触がなんだか名残惜しく感じるのを思い出させる
「ボク、ダーリンとしたことあるよ」
　耳元に唐突に話しかけられる
「ぜ、ゼロツー…チッ…」

思わず舌打ちまでしてしまう
彼女とはいつまでもうまくやれそうな気がしない
「したことあるって、なにが…？」
「キス♡」
「む……」
「キミたちにはまだ早いか!!」
誇らしげに笑うゼロツーを見ているとなんだか心がムカムカする
「あ、アタシだって、したことあるし…」
嘘は言ってないよね…
「へぇ…？誰と？キスってね、特別な人とするものなの、その人は君にとって特別な人なの…？」
ゼロツーは壁に手を付き私に対して寄りかかるような姿勢を取っている
それが威圧感を醸し出している
「そ、それは…」
「おーい、イチゴ～」
みんなが合流したそうだから、探しに来たとのこと
それじゃあ戻らないとかな…
私は探索を終え、みんなの元へと向かった

Ｓｉｄｅ：イチゴ　ｏｕｔ
◇
Ｓｉｄｅ：イクサ

「すご…」
すっかり、日は傾いてしまい太陽は水平線へと吸い込まれていっている
「もーミク、疲れちゃったぁ～」
「結構歩いたもんね～」
「絶対明日筋肉痛～」
座り込む二人を横目に俺も地面に座る

「結局、ここって何だったんだ…？」
「少なくとも生活の場であったことは間違いなさそうよね」
「じゃあ、誰かが過去に暮らしてたってことか…？」
「捨てたんだよ…」
最後に聴こえた声の方へと顔を向ける
その声の主はゼロツーだった
「かつて人間が地上で生活し、そして捨てた。世界中にはいっぱいあるよ。こんなところ…」
寂しそうに言うゼロツー
確かにこの『眼』でみた当時の人々のものであろう生活は、プランテーションのからっぽな黄金の街よりも活気に溢れキレイだった
「さて、戻るか…」
とりあえず俺達は、砂浜へと戻っていった

◇

俺達が砂浜につく頃にはもう日は沈みきっており、まさに夕食時と言ったところだ
そして、知らない間にＢＱＱセットと焚き火まで用意されている
「やりぃ!!もう出来てるじゃん!!」
「肉だよ!!肉!!」
「なぁ、もう食っていいかな？いいよな!!」
「ミク、もうお腹ペコペコ～」
イクノは焚き火の方へと視線をむけ小声で
「ほんといつの間に用意されてるんだろう…」
と疑問に思っているようだ
今はそんな事を気にするよりも楽しんだほうがいいと思うけどな
「あーんッ!!…ッ!!あちち!!」
フトシは一口で串を全部いったせいか、熱くて悶えている
それはそうだろ…焼き立てなんだから…
「大丈夫？」

「だいじょぶだいじょぶ…」
「ほら、ゼロツーも」
ゴローから串を受け取るゼロツー
「ねぇ…ゼロツー？」
「どうしたのダーリン」
「楽しい？」
「うん、悪くないかな…」
恥ずかしそうに、袖で口元を隠すゼロツーはとても可愛かった…

◇

「おぉ、焼けた焼けたッ!!」
「ミクもやる!!」
みんなが焚き火の前で焼きマシュマロなど思い思いのことをしているときにゼロツーに話しかけられる
「ねぇ、ダーリン。また泳いできていい？」
「真っ暗だけど…まぁ、あまり遠くに行かなければいいんじゃないかな？」
「ありがとう!!じゃあ行ってくるね!!」
そういうと、羽織っていたパーカーを脱ぎ捨て、海へと走っていく
「もーむりぃ…お腹はち切れる～」
「ミクったら、みんなの前で行儀悪いよ？」
「いいの!!今日はいっぱい歩いたんだから～」
ミクはそう言うとココロの太腿を枕にして寝そべりだす
その光景に、ゾロメもフトシも悶絶している
なにしてんだコイツら…
「ほらほら、見なさ～い。アイツらの羨望の眼差し～!!」
得意げにピースまでしている
たのしそうでなにより…
「みんな歩いたのは同じじゃねぇかよ!!」
「うらやましぃぃぃ!!」

「なんとでも言いなさ～い」
イチゴはホットチョコにマシュマロを浮かべてる
いいな～美味しそう～
「イクサ、飲む？」
こちらの視線に気が付いたのかマグカップをこちらに差し出してくる
「じゃあ、一口もらおうかな」
「うん」
ふー、ふー
それにしてもゾロメとフトシが
ふー、ふー
悔しそうにしてるのは見てて面白いな
ふー、ふー
ミクもいい性格してるね
ふー、ふー
「いつまで冷ましてるの？」
ナオミがツッコミを入れてくる
「だって、猫舌なんだもん…!!」
小さい頃から熱いものは本当に苦手だった
恐る恐る、カップを傾けチョコを口に流し込む
うん、甘くて美味しい
もう一杯分くらい用意できるかな
「そんなに美味しいならもう一杯入れてあげるよ」
「なんか悪いな…」
「んーん、気にしないで」
そう言ってイチゴは席を立つ
それにしても、何故人類は地上を放棄したのか…
こんなキレイな海もあるのに
もし、マグマ燃料を掘り出さなかったのなら、叫竜は現れなかったんじゃないか？
七賢人（パパ）に対する不信感は募るばかりだ

「はい、イクサ」
「うん、ありがと」
イチゴからホットチョコを受け取る
「……」
それに俺が見たあの景色…
あんなに暖かったのに、何故今の大人の街は冷たいのか…
疑問は増え続ける
そう思いながらイチゴが用意してくれたものを口まで持っていく
「イクサ、それ冷ましてない…」
「ん？」
ジュッ…
「あ”っ”つ”ッ!!」
俺の悲鳴が夜の海に響いた

◇

みんな腹が膨れ横になり眠っている
しかし、俺はなんだか目が冴えて眠れないでいた
すこし、散歩でもしようかな…
そう思い立ち上がる
ゼロツーは、どっか行ってるのかな…
ゼロツーのために用意された寝袋には誰もいない
歩き出そうとしたところでひとつの人影が動いた。
「イクサ？」
「あ、悪い。起こしたか？」
「ううん、平気」
「少し、歩かない？」
「うん、行く」
みんなを起こさないように静かに抜け出す
「なんだか眠れなくて…」
「俺もかな、寝て起きたらもう終わりだなんて、勿体ない気がしちゃっ

てさ」
　イチゴは立ち止まる
「イチゴ？」
「見て!!イクサ、こんなに星が見えるよ!!」
　見上げてみると、かなりの数の星が見える
　それこそ数え切れないほどに
「本当だ、すごい数だな」
「あ、オリオン座!!」
　イチゴが指を指した方には台形が２つ縦に並んだような星座があった
「昔は、オリオン座は冬の星座の代名詞だったんだってな」
「へぇ…小さい頃、ヒロがよく星の話をしてくれたよね」
「そういえば施設を出たらみんなで星を見に行こうって約束もしたっけ？」
　懐かしいな…
　所々思い出せないところもあるのはなんでだろうな
　みんなこんなもんなのかな
「また星は探せるよね」
「まぁ、これからもチームとして戦っていくんだろうし」
「ねぇ、イクサ…」
　イチゴは突然立ち止まると俺の方へと振り返る
「私さ、リーダーとして頑張るからさ、ゼロツーとかＣＯＤＥ：０３７とかじゃなくてさ!!私のこともちゃんと見て」
「イチゴ？」
「模擬戦のときのイクサとのキスは特別だと思ってる!!だから私はイクサとずっと一緒に…「すごい、流れ星だよ!!こんなにたくさん!!」
　上を見上げると無数の流星が空を切り裂いている
「流れ星に願い事をすると叶うんだって、イチゴだったらなにを願う？」
「さっき言おうとしてたのにな…」
「え？」

「あはは!!イクサのバーカ!!」
「はぁ?なんだよそれ…教えろよ~!!」
「教えないよ~だ!!」
俺達は笑いながら砂浜で追いかけっこをした
こんな素敵な時間がずっと続けばいいのにな

Ｓｉｄｅ：イクサ　ｏｕｔ